

# 赤軍

No. 8

共產同連合派批判特集

共產主義者同盟赤軍派

序文

「ゴミ箱の革命」「革命のクズ箱」……………(1)

「党の革命、革命の軍隊」批判……………(1)

< I > 何が「党の革命」だ

< I > 秋風に飛ばされたゴミはどこへ行く？

< II > 墮落から、墮落の論理化へ

< IV > 蜂起のための闘争

< V > 革命のクズ箱

補論

補論 I

△同盟への我々の自己批判▽……………(8)

< 序 > 我々と「赤軍派」の自己批判的総括と今後の任務と方向

< I > 現代過渡期世界に於ける現段階の階級闘争

< I > 革命的左派の三つの分化とその組織

< I > 萌芽的武装闘争から前段階蜂起

< I > 世界革命戦争の過渡への同盟の歴史的  
試練・性格・課題

< II > 我々の総括と任務

補論 I

△スターリン主義と四中委議案▽……………(23)

< 序 > 同盟内闘争の現代的意義と四中委議案の位置

< I > 秋に煮つまる権力闘争と同盟内闘争

< I > レーニン主義の限界とその止揚

< II > 攻撃型革命論か、受動型革命論か……………(8)

■共産同連合派批判特集

序文

(1)連合派との分派闘争の一過程はほぼ決着をみたといってもいい。この一過程は、彼らの肉体的、物理的解体を意味しはしない。又、我々はそのような馬鹿げたことを追求しはしない。ただ、彼らはおよそ前衛とは程遠い存在に変質したことを大衆的に確認すればいいのだ。彼らが「過渡期世界」攻撃的世界革命「前段階蜂起」論に於いて、何んの発展をみせないばかりか、完全に後退し、前段階蜂起論は最終的に放棄され、第二線から第五列への転落を開始したことを大衆的に確認すればいいのである。

このことは、「中央権力闘争の堅持」政府中枢の武装占拠」として、一応の革命的芽を残していたにもかかわらず、先秋遂に、これを貫徹しえず、否、貫徹しようともせず、何んの反省もなく羽田に出かけていった時、満天下に証明されたのである。ここに於いて、戦後階級闘争の最前線を担った同盟の革命的芽は根こそぎつみとられたのだ。

我々が昨年28/4/闘争の総括過程以降指摘し続けた、「現代革命派、新カウツキー主義(スターリン主義)、新ベルンシュタイン主義への分解こそ現在の党内闘争の性格である」という原理は、まず我が同盟に於いて鮮明にされ、革共同中核派に拡大されつつある。「口先だけのマルクス主義、実際は排外主義、日和見主義」というレーニンのカウツキーへの批判の言葉は、今正に現に復活されているのだ。

彼らの内面的崩壊「墮落」の情念は、悪臭を放ちつつ「党の革命・革命の軍隊」に躍如としている。

戦闘的、革命的マルクス主義の核心「権力問題を、現代的に発展させないばかりか、これを完全に欠落させた「前段階蜂起論」がプロレタリア国際主義を、コスモポリタニズムと反スタ主義に形骸化し、

軍事問題を軍事力学主義的に扱うのは当然である。空文句で埋めつくされた字面の裏には、権力闘争への恐怖がありありと表現されている。そのことの象徴こそ、「勝つ戦争しかない」という論理に表現される、毛沢東の「最少の犠牲」最大の効果」論である。だが、軍事上のテーゼは、政治上の「蜂起」と不可分なテーゼであるのだ。

毛沢東の戦争論は「上海—広東」での革命的な前段階蜂起の敗北の中から成長し、ここから権力闘争が内戦として展開された中から成長したのであって、彼らの「権力問題」に尻込した「恒常的武装闘争論」とはおよそ縁遠いのである。この点に関しては、巻頭論文「ゴミ箱の革命・革命のクズ箱」を参照されたい。指導部が世界プロレタリアートの普遍的利益への一切の自己犠牲を忘れる時、大衆操作主義・軍事力学主義、啓蒙主義、そして「党建設」に於いての宮廷政治で、革命の後墮落を呈しつつも、尚億面もなく、「革命」でメンを食う、「革命のプロレカール官僚」に転落するのは当然である。だが、革命は喀嚇なく彼らの正体をベタロし、ふるいにかけて、革命戦線から駆逐し、第五列へと追いやるのである。

これもまた革命であるのだ！  
叛旗は霧散し、情況派は中核カードルを転向させ、完全に崩壊過程に入り、青解「構改等」と結合し、余命を保とうとしている。これこそ新ベルンシュタイン主義の帰結であるのだ。

かつて、ベルンシュタイン主義とカウツキー主義の野合が、第二インターの崩壊過程「黄色インター」に於いてなされた如く、連合派は、内部で七花八裂—臭悪な宮廷政治を繰り返しつつ、体裁だけを整え、青解「構改」をもち込んだ、「大ブンド構想」なる黄色インター構想をデッチあげんとしている。「歴史は二度繰り返えず、一度目は悲劇、二度目は茶番」とはよくいったものだ。

このような野合構想が日のめを見ることは出来ないだろうし、又、実現したとしても、何んの力も魅力もないのである。革命のプロレカ

「はブローカーらしい構想を思いつくものである。  
(2)かかる連合派の腐敗—墮落—現代カウツキー主義(新スターリン主義)への転落は、一日にして変わったものではない。

六八年10/21—11/7の世界—日本階級闘争の壁に挑戦することを放棄した。敗北宣言—第八回大会路線に根拠を置き、4/28のとり組み—総括過程を経ての、我々との苛烈な党派闘争に耐え切れず、正体が突きだされたのである。7/6前の「二つのプロト」そして四中委—五中委を経てのデツチあげ野合九回大会があり、その反革命性の9/5での満天下での我々の「革命的制裁」によって全面化した歴史があるのだ。彼らは「9/5」を軍事的敗北といっているが、政治的軍事的敗北ではなくてなんであるうか。革命—蜂起の軍隊に彼らが勝利することは出来ないのだ。

もし、連合派の指導部内部に、我々とともに第九回大会を成功させ、革命家たらんとする同志がいるなら、その同志達は、八回大会以降の自己批判的総括をもって結果して欲しいものである。  
だが、本誌特集号の狙いは、この点にあるのではない。先秋の我々の蜂起の追求の過程は多くの同志に、連合派との分派闘争の今日的意義とその経緯について説明する機会を与えはしなかった。

獄中で苦闘していたり、いまもいる同志達或いは連合派の幻想から最終的に決別し切れないでいる同志達に、我々の主張と、事の経緯を説明する義務をもっているからに他ならない。そして、勿論、我々の断乎たる結果を呼びかける為である。

(3)補論の二つの論文は、かかる意図から掲載されたものである。  
第一論文は、赤軍 No. 1, No. 2 に続き No. 3 の位置にあたるものであり、「7/6」を経て我々が同盟中央の官僚主義的最后通告(—四中委、五中委—)を経て、独自の革命党建設を決議する前段での文章である。七月下旬—八月初旬に執筆された。この文章は、我々の「7/6」の自己批判的総括を直接に行い、我々の態度を明らかにしたものである。

## 「ゴミ箱の革命」「革命のクズ箱」

### —「党の革命・革命の軍隊」批判—

#### I 何が、「党の革命」だ

10/21の敗北は「同盟の総力量を結果しえなかった」ことにあり、同盟の総力を結果しえなかったことは裏がえせば、同盟の解体が進行していることに他ならない。「(党の革命)」「革命の軍隊」(38頁)

かくて、安保・11月決戦を前にして、決意を新たに、「内戦の質をもった階級闘争の時代」に於ては、党の独自活動の飛躍が問われ、それがなしえない党派は、階級闘争の最前線に登場しえないことである。それ故、この党の独自活動の問題は、何か思いつきの組織改革でなされるものでなく、まさしく安保決戦を闘いぬけるかどうかというこの点に一切がかかっていることを見ぬかねばならない。(同39頁)

何故「それ故」となるかは、ここでは問わないにしても、その内実は、全く内容抜きに「何か一片の通達で組織されるのでなく、まさしく組織の中枢が大家と交わり、大家を組織する第一線に立たねばならない。」(同58頁)  
全くの、「大衆運動主義+精神主義」でしかない。

要は、安保闘争の先頭に起って闘う中枢体制を築くこと、これが抑々しくも、「党の革命」だと騒ぎたてる内容である。

即ち、今、「内戦の質をもった階級闘争の時代」「恒常的武装闘争の時代」であり、「正規軍」なしには、かかる時代の闘争はあり得ず、それ故「軍建設」の遅れが10/21を頂点とした闘争の敗北を必然としてきているのであり、その「軍建設」の遅れは、「党の革命」の「不徹底性」に求められねばならず、ところが、むしろ、「党の革命」は「党の解体」として進行しているのが現実であり、このまま進行したら、11月安保闘争の政治過程に登場できなくなるから、とりあえず、「みんなまとまって」、安保闘争だけは断乎、闘おうと言っているにすぎないのであり、それが11月段階に於ける「革命」されるべき「党」の唯一の結集点だったのである。

である。だが、提起されている内容は、これにとどまらず、同盟の「党内闘争—党建設」を、現段階の国際—国内階級闘争、国際共産主義運動史に於ける、「党と軍事問題」の集中環からこれを説明したのである。「党内闘争—党建設」の性格は、ほぼこの時点で我々に対象化されていたのである。勿論、現在から把え返せば、「軍事の自然発生性の克服」が「組織形態—党の改組」問題に流れ、「前段階蜂起—国際根拠地」建設との関連で提起し切れない。

第二論文は、八月初旬の同盟中央の四中委議案の批判的検討の末、赤軍 No. 3 補論として公表されるものであった。

これは、四中委議案の日和見性—現代カウツキー主義(新スタ)への転落の根拠を、革命的次元から説明批判しようとしたものである。「過渡期世界—攻撃型革命論」を、「ロシア革命の総括—レーニン主義の発展止揚」と「現代帝国主義論」の両面から展開しようとしたものである。運動組織論面で「世界プロレタリアート論」をもって接近したものである。「前段階蜂起—世界革命戦争—世界社会主義」の過程に於ける世界プロレタリアートの階級形成の問題が整理し切れず、「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」の連関が「党の組織化」として抽象的になっていくにはある。

だが、これは、現在の我々の課題でもある。現代帝国主義論に於いて恐慌革命論を完ふなまで批判し、これが日和見主義的な「安保決戦」の論理的根拠であることを解明している。

だが、レーニン帝国主義論の「不均等発展の平準化」でこれをもっているのが、「現代帝国主義—階級危機」の解明が、必ずしもスツキリとは提起されていない。

ともあれ、同志、読者諸君は、この特集号と赤軍 No. 1, No. 2, No. 3, No. 4, No. 5, No. 6, No. 7 を通読することによって、我々の本特集号の意図は満足させられるものと思う。  
(一九七〇年一月三十一日)

かくして、「安保決戦を闘いぬけるかどうか」というこの点に「一切がかかって」(同、39頁)いたが故に、11月—安保決戦が、「敗北」した後、「革命」されるべき「党」は、「もうこれ以上、バラバラになることはあるまい」と言われるまでに、分解、解体しきってしまったのは当然である。

だから、「党の革命」を主張する人々には実は、「党の革命」はできないのである。  
第一に、「革命」しない限りどうしようもなくなった「革命」されるべき「党」は、もう、何の統一性も持たず、「組織体」として、この世に存在しないからであり、

第二に、にも拘らず、現実とは無関係に「党の革命」などと、分った様な訳の分からない抽象的言葉をもて遊んで、事足れりとしているのが彼等の特徴なのであり、即ち、「現実の革命」と無関係に色々のゴタクを並べているのが「革命」だと思っている連中の寄せ集めでしかなく、だから現実「党の革命」が日程に上った、昨年6/7月段階に於て、我々赤軍派のBUND内党内闘争の現実過程には、一片の発言もできずに、「赤軍派がもう少し、うまくやってくれたら……」だの、「BUND10年の歴史も終った、我々は個人になる」だのと、ただただ嘆息するだけで、現実には、何の対応もできなかった連中なのであり、確実に、この過程で、棺桶に足を突込んでしまっている烏合の衆であり、クズの集りではない。

第三に、何の立脚点も、統一性もなく、如何に解体し、分解しても、「組織」みたいなものとして、BUNDが存在するのは、唯一BUNDが、革命家失格者の収容所であり、過去の擬似革命家のゴミ捨て場と化することをもってのみである。

ゴミもゴミニなりに、手前の住む所はキレイにしたいというのが人情だと見える。

「党の革命」と言って、「ゴミ箱の革命」をやろうとしているのである。

## II 秋風に飛ばされたゴミ箱はどこへ行く??

「思いつきの組織改革」すらもできなくなって、行き詰って、「安保決戦が全

「である」と、一念発起して、11月決戦に於て、「第一線に立たねばならない」と決意は、してみたけれど、矢張り、ゴミはゴミである。

機動隊と真正面から対決し、粉砕される前に、11月の秋風の前に、空中分解し、どこにもなく、吹き飛んでしまったのであるから、

ゴミというのは、どこまでも薄汚く、厚顔無恥なものである。

このゴミの一派が、正しい革命論と、それを核とした組織の生命力というところを全く理解しないが故に、大菩薩峠での我々の敗北を、組織の解体、消滅と錯覚し、乃至は、願望して、そのデマゴギーを振り撒きながら、「我々は第二次赤軍である」などと言って赤軍の名を矯つて、大衆の前に現れたりしているのは、最も、ハレンチなゴミである。

「党の革命」「革命の軍隊」も、大同小異である。

その殆んどが、我々の過渡期世界論の剽窃（とくに第六章の前半など、又いつのまにか、BUND九回大会で「前段階階級」「世界革命戦争」が戦略化されていたりするのである。17頁）であり、だが、剽窃は、剽窃にしかならず、その内容の本質的理解はできないからこそ、モザイク、作文にしかならない。

だから、我々に対する批判も見当はずれもハナダしいのである。

我々の問題意識を汲み取れなかったことを泣きごとみたいに「自己批判」してみたり（53頁）、「切り拓かれるべき革命戦争が革命戦争の存在と混同され、革命戦争の存在を前提としたが故に軍事を組織する党の革命が欠落し、党の軍への乗り移りを進んだのであった」（36頁）と、何のために、我々が、前段階武装蜂起を執拗なまでに強調し、前段階武装蜂起をもって、防禦から、対峙攻撃へと主張しているのが、全く、分っていないことを、自己暴露してみたらしい。

それも、又、当然である。

過渡期世界に於る、「マルクス主義の常識を越えた解決」（同55頁）を、「平時」からの帝国主義軍隊の解体「革命の正規軍の建設」（同・65頁）という点に於てしか、把えていないのであり、「党組織論はレーニン時代の武装蜂起の党から、恒常的武装闘争を指導しうる党として新たに位置づけられねばなら」（同・57頁）ないとしている。

要は、彼等にとっては、過渡期世界の党とは、レーニンの「蜂起の党」から、「恒常的武装闘争を指導する党」でしかないものであり、それ故、レーニンの蜂起へ全てを結集しようとするその組織論より、もっと後退した地点に、過渡期世界の党が位置づけられているのであり文字通り、大衆運動の党であり、軍事力学主義以外の何物でもない。

レーニンの「蜂起の党」「蜂起の機関」「ソヴェート社会革命戦争」「各国プロ独建設」「その総和としての世界革命」という、一國プロレタリアートに立脚した党建設から、過渡期世界に於ては、前段階武装蜂起「世界革命戦争」世界プロ独「世界社会主義を現実的直接的射程・課題とした世界党建設が問われている」であり、そして、それは、一國プロレタリアートの利益を代表した党建設として押し進められるのではなく、世界武装プロレタリアートの利益を代表し、それに立脚した党建設を展開し、その世界党建設の徹底化をもつてしてのみ、各国プロレタリアートとの、結合、指導もありうるということが、全く理解されていない、一國革命主義者でしかないのである。

彼等にとっては、レーニンとの違いは、蜂起の前段階に於て、武装闘争が起きていか否かだけの問題にすぎないのである。

だから、我々に本気で、骨をもつて、党派性を示そうとすれば、する程、レーニン主義の原則の当はめで対応するしかないのである。

的はずれにも、我々への憎しみだけが、自己の存在を支え、その憎悪化しつつある焦点ボケけた男「高見沢」の文章が、それである。（27・28頁）

その我々への批判の第一は、「蜂起がプロレタリアートの蜂起である限り、帝国主義国家権力の粉砕、破壊のうちに、プロレタリア権力機関の創出を包含するものとしてある。」云々と、レーニン、四月テーゼを読んだ方がスッキリする。「労働者階級の新しい国家の型「ソヴェート」」「蜂起の機関」「ソヴェート革命」「社会革命」をもつて、我々を批判し、全く前段階武装蜂起の位置が分つておらず、その第二が、「ブルジョア階級に対するプロレタリア階級の闘争は、内容上ではないが、形式上は何よりも第一に、国民的闘争である。各々の國のプロレタリア階級は、当然まず自國のブルジョアジーをかたづけねばならない（共産党宣言）」を持ち出して、「一國に於るプロ独樹立から、世界革命へと主張し」「プロ独の総和」「世界革命」のレーニン革命論をもつて、

第三の問題については、若干触れたので、第一、第二の問題について批判しておかねばならない。

だが、正直言つて、どうしても、まともに取り上げて、批判する気になれないのである。

何故なら、BUND7回大会―8回大会―東大闘争―4/28を経て、何の為に党内闘争―分派闘争をやってきたのか、少くとも、ニエンスの差はあれ、その基準はレーニン主義の発展・止揚の問題として「現代革命と党」としてあったのではなかったのか、といわざるを得ないからである。

又、過渡期世界に於るレーニン主義の教条化は、スターリン主義でしかないことも、これまで、幾度も、機会あるごとに、述べてきているからである。

故に、今、彼等が、どの様に、レーニン主義の教条にとどまることによつて、墮落から、墮落の論理をまさぐり出しているかを明確にすることが、最も、現実的批判とならう。

### 墮落から、墮落の論理化へ

「我々は現段階を『内戦を部分的、萌芽的・潜在的にもつた平時』として把える。」（同、5頁、序章）

そして、この時代が、「恒常的武装闘争の時代」なのである。

だが、彼等が強調せんとしていることはこの時代を「客観主義的に考へてはならない」（同59頁）ことであり、党直轄の正規軍に牽引されてのみ、その時代は切り拓けるのであり、その「戦争」は、「正規軍による遊撃戦」（同5頁）であり、具体的には「機動隊」「侵略反革命武装部隊に対する遊撃戦」（60頁）であり、「奇襲を基本とし、一個一個の戦場で確実に勝利をあげる。すなわち、小部隊の機動隊の殲滅（＝解体、武装解除が主目的）である。」（60頁）そして、「この恒常的武装闘争の内実が階級形成論としてのソヴェート運動

矢張り、我々を批判しようとし（だから、彼にとつては、過渡期世界論とか、世界同時革命「世界革命戦争」など、全く関係ないのである。）第三に、「彼等の世界プロ独論も、世界革命戦争の過程で分業関係の再編まで行なりというもの―世界プロ独「社会主義」ということになり、世界プロ独自身も否定されるのである。」（28頁）

この批判文によつて、想定されている世界社会主義―世界共産主義への道は、一國プロ独樹立―その総括「世界プロ独」プロレタリアートの世界的な民主主義的中央集権（48頁）・世界プロ独の下での社会主義建設「世界共産主義」と、靜止的・段階的に設定されているのである。

我々にとつて、「世界革命戦争の過程で分業関係の再編まで行なう」ことは、当然のことであり、必然である。

何故なら、世界革命戦争の過程とは、世界共産主義の領導の下に、帝国主義ブルジョアジーの打倒を永続的に進展させる過程であり、全ての、プロレタリア、人民は自己の武装権力機関として、世界革命戦線を組織しその下に、全ての生産、分配、消費、生活を組織していく過程であり、そして、この過程こそが、世界プロ独への道であり、だが、この世界プロ独への道は、民族・國家の廢絶・階級の自己止揚の過程であり、それ故、世界プロ独への世界革命戦争の時代とは、世界プロ独の樹立運動であると同時に、世界プロ独そのものをも、自己止揚していく過程なのであり、決して、世界革命戦争―世界プロ独―世界プロ独の下での社会主義建設などという靜止的、時代区分的、段階的にあるのではなく、世界革命戦争の永続性、徹底性の中でのみ、世界プロ独―世界社会主義が実現されるのである。

だからこそ、この時代の、世界プロレタリアートの統制司令部は厳として、世界共産主義の時代であり、それ故、一國のプロ独樹立―その総和としての世界プロ独―その民主中央体制「世界プロ独」下での社会主義建設なる路線は、一國的労働者國家の存立、一國社会主義建設、民族、國家の自主性「プロ独」民主主義等を要求し、世界革命戦争の時代にあつては、世界共産主義と敵対する反革命路線として登場してくることは不可避である。

以上、高見沢の文章に集中的に表現されている様に、「マルクス主義の常識を云々」「レーニンの党を乗り越えた現代革命の党」などとゴタクを並べてい

論に導かれねばならない。」(57頁)

「ソヴェト運動とは現存する闘争ではなくて、その闘争を指導しぬく組織論的意味での目的意識性なのである」日常闘争に於ても、ソヴェト型組織によって、階級的闘争を展開する事が出来ないと云ふのは過渡期世界の階級闘争の實に対応したものに他ならない。」(57頁)

「権力闘争の一時代(カンパニア闘争の中央権力闘争)から、恒常的武装闘争の時代への移行期には、労働者階級内部の少数派運動もこの恒常的武装闘争と結合されはじめて階級的意義をもつてくる。」(13頁)

以上、言っていることは単純なのである。

即ち、過渡期世界の階級闘争の特徴は、全共闘運動や、反戦運動の如く、少数派運動ソヴェト型を引き起さざるを得ず(階層分解によつて)。この闘争が維持・拡大される為には、「侵略反革命武装部隊」機動隊を一個一個、粉碎していかねばならず、これを粉碎していくGEVALET隊が必要であり、これが、正規軍共産主義突撃隊だと言っているのである。

なおかつ、この闘争が、「蜂起の質」をもった闘争であると規定し、それ故、武装蜂起を抜きに、この闘争の積み重ねの上に、いつのまにか「この闘いを将来、正規戦、なかく機動隊に発展する遊撃戦として闘うのである。機動隊の消耗を通して自衛隊を丸裸のまま引き出して、本格的内戦」世界革命戦争に於て解体するというのである。」(60頁)

「確実な勝利する」機動隊の衝突を、ソヴェト型運動と結合して、ゲリラ的に展開していたら、いつか、その内に、世界革命戦争「内戦の時代がやってくる」といっているのである。

明かに墮落の論理化である。

彼等が、我々に対する批判として、見当はずれであれ、一生懸命に展開していたことは、「ゲリラ路線反対」であり、それは何よりも、帝国主義国家は「諸階層分解が存在しながらも、中央権力のもとに統合されている」(5頁)からであり、「ソヴェト運動がソヴェト権力へ高まるためには」「武装蜂起が全面的・系統的に組織され、かつ計画された戦術による攻撃型武装中央権力闘争が不可欠」(16頁)であったはずである。

昨年九月から、たったの一二月の間に、「中樞が第一線に立つこと」を決

意し、それでも、結局、何もやらなかったことの結果として、「武装蜂起の必然性」を放棄し、機動隊殲滅のゲリラ戦の積み重ねの上に、世界革命戦争「内戦を願望し、夢想し、それを路線化し、「我々は勝つ戦争しかやらない」と、タワ言を述べるに至っているのである。

これは、前段階武装蜂起の根本問題を理解していない結果であるが、それについては、次に明らかにすると、実は「前段階武装蜂起」抜きに「恒常的武装闘争の時代」への願望は、文字通り願望でしかないことを明確にしておく。

第一に、「機動隊の正規軍による遊撃戦」という「ゲリラ」路線化は、実は、この間の我々の敗北の結果の論理化でしかないこと。

昨年、6月7月に於る我々とのBUND内党内闘争に於て、秋、安保決戦にあっては、その戦場は、「羽田現地闘争」としてはなく、「首相官邸」政府中樞」にあることは、ほぼ常識的基準としてあった。

だが、東大闘争を経て、4/28以降の敗北は、帝国主義ブルジョアジーの軍事外交戦略の確定、その下への諸階層の統合、全共闘、地域共闘運動等々の包囲網の拡大、個別撃破、を通して、9月10日11月闘争は、我々が追い込まれたことの結果として、羽田闘争、機動隊とのゲリラ戦としてしか展開されなかったであり、その量的拡大に勝利の展望は、決して生れない。

第二に、我々の前段階武装蜂起の敗北のみならず、仏、独、米等々の60年代後半の先進国階級闘争の昂揚と、その前段階武装蜂起の敗北は、今、世界プロレタリアートの敗北的後退過程を現出させており、その結果、帝国主義ブルジョアジーは、ドイツのブランドの登場と、オールドリアル税の承認、ソ連への武力不干渉条約への交渉等々と、又、米帝は「ヴェトナム和平」から「米中会談」へと、仏は、米帝が独との協調体制と、全て、70年代、侵略「抑圧」反革命戦争に向けて、「60年代後半激動の時代から協調と平和共存の時代」の下に、諸階層分解が存在させながらも、中央権力のもとにますます統合させていく過程として進行させていること。

このことは、現時点のプロとブルの攻防、戦争の攻防のヘゲモニーは、帝国主義ブルジョアジー、敵権力が握っているであり、それ故、如何にソヴェト型運動が、全国的に、地方分散的に展開されたとしても、武装蜂起という一

点に集中した力として爆発していかない限り、この間の全共闘運動の攻防が明かにして来た様に、帝国主義ブルジョアジーは、一個一個の闘争を個別撃破的に粉碎していくことが可能なであり、それ故、ここで、例え、機動隊の部分的殲滅「遊撃戦による勝利を挙げたにしても、総体として、プロレタリア、人民が、封じ込められていく過程として進行せざるを得ない。

第三に、彼等にとって、この恒常的武装闘争は、ソヴェト型運動と結合してこそ、その戦略的、階級的意義があるから、その前提にあるのは、ソヴェト型運動「少数派運動」階級の労働運動の存在である。

だが、現在、問われているのは、4/28の敗北過程以降、その様な個別闘争が、個別撃破され、大学全共闘、中小闘争等々は、ロクアウト・レッド・パージ等々の下に、確実に射じ込まれている時点にあるということである。

ここから、必然的に、彼等は「蜂起を準備すべきソヴェト運動と結合しないゲリラ活動の路線化は、「イデオロギーと関係がない」として官憲に逆手にとられる結果」(28頁)となることからして、まず、「ソヴェト型運動を」「生産点・生活点でのプロレタリア・人民の獲得を」という、生産点主義・経済主義に転落するか、「イデオロギーと関係ない」ゲリラ活動をやるか、どちらかの道しかないのである。

第四に、そして、重要なことは、侵略「抑圧」反革命戦争への道一なし崩しファシズムの時代とは、20年代「30年代初期に於る、独・日」が明かにしている様に、権力「戦争をめぐったプロとブルの攻防を開始させつつも、基幹産業労働者は、軍事経済の拡大の下に、そこに於ては、生産点からの根底的経済危機を顕現させないまま、戦争体制に集約されていく(日本に於る、産業報告会、独に於る、工場評議会から「工場管理人」「経営協議会」)であり、一方、その時期の政治危機「階級危機の発現は、その中小零細等の弱い部分に於て確に「ソヴェト型運動」を登場させるが、(日に於る、工作運動、独に於る赤色戦線等々)、かかる運動は、生産点にあっては、レッド・パージ・ロクアウトをくり、生産点から全て追い出され、街頭にあっては、敵権力が粉碎されながら、侵略「抑圧」反革命体制に全て集約されていく過程として進行するのであり、現在、日・独・仏、全ての帝国主義国に於てかかる事態として進展していることこそ、危機なのであり、「ソヴェト型運動」「恒常的武装闘争の

時代」なる路線は、未だエネルギーをもって、その高次の自然発生性を発現させている、言わゆる「反戦派労働者」をかかざる事態に追い込むことであることは、目に見えているのであり、その意味に於て、極論化するなら、ファシズムを下から支える運動にしかならないことをハッキリさせておかねばならない。

#### IV 蜂起のための闘争

「大学闘争の時代に於ては、我々は個々の戦術を戦略内容から規定し、戦略内容を導き出せる戦術を提起することによって、諸党派を領導してきたのであるが、階級闘争が内戦の質をもって来る時、戦略の実現とは他ならぬ武装蜂起の実現であり、それを個々の局面的戦闘においては実現し得ないのである。従来我々の党派性であったところの戦術の貫徹のなかで戦術を実現しようとする傾向は、蜂起に向けての計画としての戦術としてまとめあげられねばならない。」(56頁)

全く正しい。旭凡太郎、久々のヒット作である。

だが、BUNDに於ては、蜂起が、「日取り」とは勿論、言わないまでも、どの文章を読んでも、蜂起がどの様な条件と情勢の下でなされるかとしているのか、一行に、見たことがないのである。

「武装蜂起」は権力の関係で、宣伝してはならないことなので、我々、部外者には、全く分らない様に進行させるとも言うのだろうか。

もし、そうなら、それは誤りである。何故なら、大衆の未端まで、蜂起へ全て、集約する戦術、活動を提起しない限り、計画としての戦術など遂行されるはずがないし、又、ある日、突然に蜂起したら、それこそ、「クーデター」ではないのか。

明かに、この作文は、自己の破産を声明、断言しているのである。

何故なら、現在の階級闘争の段階に於ては、「蜂起に向けた計画」としての戦術をもってしか、党派は、存在しないこと、だが、この党派は、「武装蜂起」の情勢と、その貫徹形態を確定していないこと、それ故「計画」としての戦術」

はそもそも、存在するはずがないのであるから。

そして、それを誤魔化し、論理化するために、「恒常的武装闘争の時代」「機動隊へのゲリラ戦」をやっていたら、その内、何とか展望が出てくるのだというデータまで、大衆を組織しようとしているのである。

事実、彼等は、70年代武装蜂起とさえ、言っていないのである。ただ「70年代を通じて聞われ続けるNATO、安保紛争闘争を恒常的武装闘争として闘うことであり」(44頁)としか、言っていないのである。

「我々は単純に国際反革命同盟の解体をおとすものと想定するわけにはいかない。」「だが、国際反革命同盟の再編に決してスムーズに進んでいるのではなく、国際帝国主義の死闘の表現なのであり、なし崩しプロレタリアの進行は各、帝国主義内、インフレーション、産業合理化・軍事・外交路線をめぐって、矛盾を蓄積させているのである。」「こうして帝国主義国内の階級の攻防に煮つまっていくのである」(同、43頁)

何よりも、問題なのは、この階級危機として煮つまる構造が、経済的、政治的・社会的危機として、市民社会の末端から根底から動揺、解体するものとして、把えるか否かである。

第一に、帝国主義段階にあっては、産業、個別資本の不均等発展の不均衡性は、独占の高度化、金融寡頭制の強化によって恐慌に特徴をみる資本主義の矛盾を拡大させつつも、独占の危機には至らないこと、換言すれば、独占の危機を国家との結合を媒介に、国家間の不均等発展の不均衡性に転化集中されること。

第二は、それ故、この時代に於ては、資本主義の暴力的資本主義的解決は、国家間の暴力的解決＝戦争をもつてしかなく、

第三に、それを言い換えるなら、資本主義の根底的貫徹は、戦争まで、軍事経済の拡大・余剰資本の処理として、いくらでも引き延びていくこと。

第五に、「今、全ゆる帝国主義がめざそうとしているのは、かかる帝国主義が推進した経済・政治・軍事コースであり、その体制である。産業複合制統制経済＝反革命＝侵略軍隊＝反革命同盟＝反革命共闘行動」と永続的局地的反革命＝侵略抑圧戦争であること、現代帝国主義の革命である(同)こと。

以上からして、現在の階級危機は、帝国主義国家が侵略＝抑圧＝反革命戦争

## (V) 「革命のクズ箱」

確かに、我々が勝利し得る、もっと有利な条件、プロレタリアが、戦争・内戦を行う時その原則は、第一に「敵の動きを知り、味方の動きを知らせないことである」そして、そのために、プロレタリアにとっては、第二、「戦場が広ければ広い程良い」のである。

だが、前段階武装蜂起は、戦場がほぼ、首都＝権力中核と限定し、我々は、公然と、(日時は明らかにしないとしても)宣伝するのである。

まさしく、このことこそが、前段階武装蜂起の困難性であり、これまでの戦争論の常識を越えた、戦争なのであり、ここにこそ、これまでの「マルクス主義の常識」を越えた「軍建設」論が必要なのであり、再度の組織論が必要になっているのである。

機動隊とゲリラ戦を行う軍なのである、軍の中に入らないのである。於て、上廻らなければならない。

67年10/8に於て、ビンゲバーが、機動隊の壁を突破したのも、彼等の防備が、ジグザグデモに対する守備体制から、若干の攻撃体制に移った質でしかなかったからである。

現在は、ビン・ゲバに対する防備体制から成長し、それ自身が攻撃的に組織されている段階である。

それ故に我々の軍は、銃・爆弾・あらゆる武器を使いこなせる軍でなければならない。

第二に、「敵の動きを知り、味方の動きを知らせないこと」は、前段階武装蜂起の特殊性から、技術の段階に於て処理しなければならぬからこそ、徹底した、非合法活動を身につける、集合＝離散の訓練を不可避としているのである。

第三に、同じことだが、それ故、武器等々の調達のために、徹底した地下組織を結合してこそ、それも、可能となるのである。

第四に、国際根拠地建設等々の問題にリアルに武器の問題として問われてく

に向けての反革命同盟の再編であり、帝国主義国家の高次の自然発生性をもったプロレタリアとの攻防を通じた再編としてあるものであり、それが、あたかも、侵略＝抑圧＝反革命戦争以前に、資本主義の根底的危機＝経済危機、社会危機＝もたらす様な恐慌がくる様に、錯覚したり、想定したり、願望したりはできないのである。

そして、蜂起を、ソヴェト革命＝ブルジョア権力の根底的崩壊＝市民社会の末端までの崩壊＝社会革命として、設定する限り、蜂起は、侵略＝抑圧＝反革命戦争で自国帝国主義の敗北まであり得ないことであり、それ故、恐慌を待望したり、「恒常的武装闘争」の自然成長性の中に、資本主義の根底的崩壊を期待したりするのである。

それ故、この時期に、世界革命戦争の防禦段階＝帝国主義の法則貫徹する時代から、対峙、攻勢にもち込むことよってのみ、プロレタリアートによる世界革命戦争の時代がもたらされるのであり、(労働者国家の根拠地化＝世界党＝世界赤軍)それは唯一、各国帝国主義列強に於て、その各国プロレタリアートが文字通り、世界プロレタリアートとして登場することをもってのみ、必然とされるのであり、それは、権力＝戦争をめぐった階級攻防の時代に、各国プロレタリアートが、一度、自らを権力として組織することをもってのみ可能となるのである。

それ故、現在、全ての闘争を蜂起に向け組織しなければならぬのであり、それ故、我々の世界党＝国際根拠地建設＝蜂起の軍隊建設を党の独自の任務として、それと一体化、乃至は、全てのプロレタリア・人民を従わせていかねばならないのである。極論化するなら、我々の主体的準備＝軍建設が、蜂起のための闘争なのであり、このことは、党の利害と全人民の利害はかかる意味に於て、一体化、同質化させていく過程でもあるのである。

幾度も強調するが、個別闘争で如何に、個別撃破し、ソヴェト型運動が登場したとしても、戦争の「ゲモノ」を敵権力＝ブルジョアジーが握っている限り、確実に敗北し、侵略＝抑圧＝反革命体制にくみ込まれているのである。

第五に、前段階武装蜂起貫徹以降の展望は、国際的には、世界党＝国際根拠地＝各国前段階蜂起という世界革命戦争の対峙、攻勢関係が、それを支えると同時に、国内的には、革命戦線大会成立、結集のために、各地方からの動員、各地に於る蜂起＝全国蜂起を徹底的に追求していかなければならないのであり、ここに於てはじめて、これまでの戦争論の常識が通用するのである。

※今、党が組織しなければならぬ「軍」とは、この様なものである。「勝つ闘いしかやらない」それ故、ヘッピー腰で、機動隊にゲリラをかけるしかできない軍など、「革命の軍」ではない。

それ故BUND連合派には、本格的闘争はできず、適当な個別闘争で戦闘性をだけ、ハッキリさせて、自己満足している、クズしか集らないであろう。

### 《同盟への我々の自己批判》

我々には以下の行為と、そこに内在する基本的傾向を確認し、自己批判する。

- 一、同盟議長以下、諸同志に対してのリンチを加えたこと。
- 一、同盟議長を結果として権力に売り渡したこと。
- 一、以上の行為をもって、同盟を破壊法攻撃と非革命的分裂の危機にし、一時的に追い込んだこと。

一、7/6以降、その行為と惹起された事態の意味を理解しえず、我々の弱さと党内闘争の敗北の事態を排外主義的に合理化する幾つかの「別党」的「分派」的行動を行ったこと。

総じて、現代過渡期世界の前段階蜂起—世界革命戦争の前段階における、権力に対決する（党—先進的集団—大衆）の武装闘争の萌芽の開始点での、又我々がかかる萌芽を主体的に前段階蜂起—世界革命戦争に推進する行動（党としての闘争）が、とりもおおさず、同盟内党内闘争を通して同盟の党への飛躍として推進すること（党のための斗争）とが一体であり、同じ事柄（即ち同盟総体を党に昂める）の二側面として獲ち取らねばならない時点での、即ち、党—先進的集団—大衆の三者が武器を持ち、これをまず党から武器—軍団がもたれ、かつそのことに於て、前衛自身が「武器—軍団—戦争」の論理に拜跪する諸自然発生性（軍事力学主義、スターリン主義、解党主義、無政府性）を克服すること、これを通じ、党—先進的集団—大衆の総体の自然発生の武装闘争を意識的武装闘争に止揚する、新たな前衛自身の政治性・組織性・党組織形態を確立することが、党に先行的、根底的に問われる時点での、換言すれば、初期の「武装闘争を行うか否か」（これを前段階蜂起と把えるかどうかは別として）が「武装闘争を如何に行うか」の関連で、不可分一体に展開される。新たな党内闘争の段階での移行期で、更に換言すれば、「武器を如何に使いこなすか」が、真刻な党内闘争の質的發展として不断に武装対峙を形成する段階で、又これが権力との対決をめぐり、人民内部の矛盾の次元にある武装対峙であるものが、「党が革命されねばならない」ということこそから、この次元を飛びこえる危

## 補論

### 補論 I 同盟への我々の自己批判

### 補論 II スターリン主義と四中委議案

険性—そのことは我々自身の弾圧を通して消滅につらなるのだが—を持つ段階で、古い党規律を守りつつ、「武器を正しく使いこなす」ことに於て、そこで養われた政治性、組織性が過去の党規律と党組織形態を、質的に止揚し、全く別の新たな総体の武装闘争を正しく意識的なものへ指導する党の「先進的集団—大衆」への関係、或いは党内の政治生活の在り方を確定した、即ち「武器—軍団—戦争」の自然発生論理をのりこえるものに物質化されねばならぬ段階で、即ちこのような過程を通して武器を正しく使いこなす潮流が登場することに於て、党内闘争が決着付けられる段階で、それ故、我々にとって政治性—組織性を、今一歩引き上げ「党と軍事」をめぐり我々自身の自然成長性を克服する特異な党内闘争過程での「その在り方」を党規律を厳守することにテコに古いものから新しいものへ、同盟自身を新たな同盟に連続的に止揚し、意識的武装闘争へ自然発生的武装闘争の動向を再編—昂揚する政治性—組織性—同盟内に於ける「在り方」が問われる段階でこれを獲得しえず、我々自身—軍事力学主義—スターリン主義—解党主義—的傾向に墜落して行つたのである。7/6以降、我々の犯した行為と引き起こした事態を理解しえず、或いは直感的にしか受けとめえず、「赤軍派」総体を、かかる克服の問題点—（党と軍事）に於ける前衛自身の自然成長性の前衛自らの克服）を獲得し、革命的自己犠牲的自己批判運動を通し（当然のことであろうが）我々の変質を通して引き起される同様な事態を最大限すみやかに克服し、かつ我々の変質をものりこえ、同盟総体の変革が秋の武装闘争を荷い切る党への飛躍に連らなる如く聞いえなかつたのである。

それ故、我々、現段階に於いて「軍事力学主義—スターリン主義—解党主義」的な我々自身の自然成長的、無政府的傾向を認めるものである。

＜序＞ 我々と「赤軍派」の自己批判的総括と今後の任務と方向—

(a) 我々の反革命的行為をもって引き起された連の事態の、現代世界革命出発に向けての現実的分岐点とも主体的にとつていえる程の—真刻性、根底性を主体的に解明—総括するには、

(b) そしてこの解明—総括をもって血肉化し、我々を鍛え直し、今後の我々の任務と方向を定めるには、

(c) 同時に、かかる我々の自己批判の内実と在り方及び今後の任務と方向が、同盟にとつても決定的な出発点ともなるよう定めるには、どうしてか。

(一) 階級闘争の現段階の性格を現代過渡期世界に於いて歴史的・論理的に如何なる位置を占め、同盟は「今、何を問われているのか」を解明し、この上において同盟の任務を定め「党内の今日的意義」を確認するところから出発されねばならぬ。

これらの関連で

(二) 「赤軍派」は如何なる位置を頭初もち、今如何なる位置に墜し、何が問われ、何をどのように自己批判し、これを通して、過去の「赤軍派」同盟員は、今如何なる任務と方向を与えられるか。

誕生から7/6—7/15—7/18とその後—現在の過程を通して明らかにし、同盟の「処分」を如何なる「内実—形式」をもって主体的に受けとめるかを明かにしなければならぬ。

以上でもって「赤軍派」の自己批判的総括と克服の方向を定め、

(三) P B—C C—大会の統一処分を服する姿勢の原則を確定しなければならぬ。

以上の如き順序で我々の総括と課題を明らかにしたい。

### I 現代過渡期世界に於ける現段階の階級闘争

#### —革命的左派の三つの分化とその組織—

一昨年六七年世界階級闘争は、全世界の人民の内に潜在的にあった世界革命戦争の世界全貌の端初を、ベトナム人民の英雄的闘いを噴火口に、正に論理的・時間的、永続的、世界—一國性をもちて登場させたのであった。現代帝国主義の独特な運動を内在的要因としたなし崩しプロック化—なし崩し統制経済化—なし崩しファシズムへの権力再編、侵略、抑圧、反革命戦争の危機の増大とその局地性から世界性への拡大の中で、これに疎外された過渡期社会の階級

闘争をも巻き込まれ、各国プロレタリアートはただ一つのプロレタリアートとして自己を表現すべく、帝国主義の侵略、抑圧、反革命、これに規制され、これを助長するスターリン主義運動をも同時に乗り越え、先進的集団—現代世界革命派の萌芽に導かれ、政治闘争を世界—一国的に結合せしめ、この力をもって同時に、それ自体の中に政治革命を内包し（中央権力闘争）個別経済闘争の個々の論理を乗り越え、社会革命を内包し、政治革命の準備を促進し、前段階蜂起—世界革命戦争の飛躍の前段にと成長したのであった。

O.L.S. 米反戦闘争、黒人闘争、仏の5月革命、西独非常事態闘争、チエコ人民の反乱、中国文革 etc.、そして日本の反戦全学連の10/21闘争……68年階級闘争は増々そのことに鮮明にこたえたのであった。

だが同時に、世界的有機的連鎖の体系の一環のなかでの、なほくずしファズム、侵略、抑圧、反革命の増大に対して、「先進的集団—労働者人民」の即自的過渡的武装闘争は、前段階蜂起—世界革命戦争を貫徹することができず、先進的集団をして分裂せしめ、混乱せしめ、彼等をして「世界党—世界赤軍—世界革命戦争」の実践的攻撃の世界観をもった普遍的科学的な前衛とその団結体—党へ、その実践と意識を転倒せしめ始めたのだ。

だからこそ、68—69年階級闘争は世界革命派の革命的党内闘争、分派闘争—党建設の開始の時代でもあったのだ。形成された始めた前衛は、現代過渡期世界の科学化対象化した自らの実践の世界観を、攻撃的「世界党—世界赤軍—世界革命戦争、世界革命戦争—世界プロ独—世界社会主義—世界共産主義」への確立へと向い、他方でのこの指導性でもって、自然発生的武装闘争を目的意識的の武装闘争として止揚すべく、即ち軍服を着た先進的人民—革命の軍隊と人民の戦争過程での交互媒介的指導—被指導の関点を通過して「武器—軍団—戦争」の論理の自然発生的革命の軍隊への流入と混乱に対して、党が、人民をかかざる軍隊を媒介にして間接的に（直接的にもかつ）人民の中に「前段階蜂起—世界戦争勝利」のヘゲモニーを定着させるべく、革命の軍隊そのものの自然発生的性を克服すべく、党の軍隊をもって指導する関係を通して党自身の内部において、即ち前衛自身が革命的政治家であると同時に、革命軍人である「二重性」からの不可避の「党と軍事」をめぐる自然発生的、無政府性を克服する政治性・組織性の科学的形成に永続的に悩まざるを得なかったのである。

即ち過渡期世界論—攻撃型世界革命論の領域をめぐる争いであった。

第二に彼等が実践者である以上、自国権力と世界反革命戦線との武装斗争から革命戦争の推進過程で、生死の戦場の過程で、自然発生的武装斗争の幾多の敗北と挫折、混乱、不信、教訓等を通して、階級形成—党形成の革命論、革命戦実践を結合の基軸にしての「党—軍団—革命戦線（統—戦線—大衆）」の結合の在り方の確定に向った。そして彼等の敗北—挫折の根拠が過去の合法的急進的民主主義斗争とは違い、武器を人民がもつことによつて、敵に勝利し得ると同時に、一切が人民自身の責任に撥ね返ること、即ち、人民が自らで自立することを究極的に要求され、そうでない限り決定的な敗北をきつすること、人民が武器をもち自立することによって形成されたかたる新たな矛盾—武器—軍団—戦争」の自然発生的論理を、プロレタリア的革命的意識性—に止揚する意識的実践的指導性の未確定にあることを確認したのであった。

このことは最終的に「党—先進的集団—大衆」の労働者人民の団結が「党—先進的軍団—革命戦線」の連関に矛盾を持ちつつ発展し、党が過去、民主主義の二重性を指導する永続的矛盾を持つていたことを、今一歩質的次元を昇められ、即ち「民主主義」を勝ち取ること自体が軍事に媒介されることに於て（以前は議会、組合、街頭デモ、etc）過去、前衛自身が「党と民主主義（議会—組合）」をめぐる永続的矛盾と前衛自身の自然成長性を克服する意識性、政治性、組織性が発展転化し、「党と軍事」の永続的矛盾と前衛自身の自然成長性を克服する「意識性—政治性—組織性」の確立に達着したことを意味する。

即ち、萌芽的武装闘争を前段階蜂起—世界革命戦争の目的意識的闘争に転化せしめる段階で、最初に述べた「過渡期世界論—革命論」の確立に向うと同時に、他方でこれと一体に実践的武装闘争の指導に於て、「党と軍事」の永続的矛盾を如何に克服するかに至った。

第三に、第一・第二の革命的左派内部の理論斗争—党内闘争の帰結は最終的に革命論に従って階級形成—党形成を行ない得る組織、他方それが「党と軍事」の矛盾を永続的に止揚し得る。「どのような組織を作るか」の組織問題の領域に於て最終的に争われているということである。だからこのような「過渡期世界論—革命論」「党と軍事」の前二者の相対的独自性を持ちつつも「党と軍事」に集約され、これらが「如何なるか」組織を作るのに至っていることからみ

この政治性、組織性は一方に於て現代過渡期世界の弁証法性を科学的に解明する革命的唯物史観の確立及び現代帝国主義市民社会—過渡期世界解部をめざす革命的経済学の確立に見出されつつ、経験を媒介に革命論に導かれる全人格的政治生活に於て与えられるが、このみでは全く不十分で主観性を併存させるのに対し（それ故にその科学的裏付けをめぐってこそ党内闘争—党派闘争がなされるのだが）その政治性—組織性の内実の保証は、帝国主義権力—世界反革命軍を打ち破る前段階蜂起—世界革命戦争の攻防の性格から引き出される党の政治参謀本部—前線参謀本部—党直轄の革命軍団のそれぞれ独自の機能及び内部構式、結合関係の指定からの党の組織形態や細部討議—自己批判—相互批判等、組織内生活の屈伸—柔軟性—ちみつきから形成される、に媒介されて始めて保証されるのである。それ故、結局「党と軍事」をめぐる前衛自身の自然成長性の克服—の問題は「前段階蜂起—世界革命戦争」「世界党—世界赤軍—世界革命戦争」の主体的攻撃的革命を実現せしめるべき党の型—規約をどの様なものにするかによつての形式によつて媒介されこの錯乱した関係を止揚し得る方向を闘うのである。米S.N.C.C.、B.P.等の黒人解放闘争と米革命—世界革命をめぐっての分裂、米S.D.S.の中央派系とその他との分裂、西独S.D.S.の非常事態法敗北以後の自国軍隊解体斗争とN.A.T.O.粉砕闘争の方向をめぐってのそれ、等々の党内闘争—分派闘争—党建設等の特徴は、第一にベトナム和平にも拘らず戦争の激化、米ニクソン登場を通して、中近東、朝鮮—アジア、中南米等々へのエスカレーション、国内反動と暴力、戦前からニューディール体制のなし崩しファシズムへの再編、西独、日帝の興隆と英仏等の没落の不均等性をもちつつ、権力再編と侵略抑圧反革命の拡大、労働者国家群の危機と反動性（労働者国家）、群衆の抗争、他方での全世界の人民の、過去戦後体制下の既存価値—闘争—その運動様式を打ち破った永続的の反乱と一国的個別的三プロツク的に分断された闘争が、その歴史性—個別性を乗り越え、ただ一つの人間解放—世界共産主義—世界社会主義—世界プロ独をめざし、米帝国主義を筆頭とする世界反革命戦線に非和解的に永続的な武装闘争—革命戦争への首尾一貫した闘いの継続。

これ等を如何に把え、如何なる革命を実現するのか、の問題が全世界の革命派の焦眉の課題であった。

て、今度は「どのような組織を作るか」のその論争の性格を検討してみよう。

さてかかる「革命派」の自然発生的武装闘争から目的意識的武装闘争の飛躍の過渡期での党派闘争—分派闘争は、基本的に三つの傾向的潮流を生み落している。現象的には「左—中」「右」として表現されているが、これは全く至少で俗物的区別である。「過渡期世界論—革命論—党と軍事」に渡る様々な見解の相違は、「どのような組織を作るか」をめぐる如何に分化して行くかをめぐって、以下の如くなるのである。

過去の武装闘争以前に於て確立された「階級形成—党形成の内的連関」—「党—先進的集団—大衆」の連関を踏えて接ぎ木されたレーニンの上から、外から（勿論「内部」における外からもある）の意識的指導性、上からの中央集権的職革型中央集権的組織の前衛的政治組織基準は、分解の危機にさらされている。何故なら、その組織自身、「前段階蜂起—世界革命戦争」に出会う。過渡期世界論—革命論—党と軍事」に於て、未確立で、確立過程にあるが故に、下からの権力に対する自然発生的武装闘争の波を吸み上げ、意識的なものにするに於いて限界を持つことに於いて、レーニン主義そのものへの疑問が提出されるのである。この段階において問われた根本的問題は、以下の如くである。過去において普遍的であった原則が、現実に応用し得ない場合、原則に内在する意味を止揚し発展させることが問われる。

だが、これを止揚し発展し得ないところから、原則を踏みはずした修正主義的傾向が生まれ、他方原則一般の強調から教条主義的傾向が生まれているのである。だが注意しなければならぬことは、これは傾向であつて結果として修正主義や教条主義に転化するものである。換言すれば、レーニン主義を内在的に止揚せんとする全ゆる創造的動向が、教条主義や修正主義的傾向を胎んでいるのである。にも拘らず、これ等は、最終的にレーニン主義を創造的に発展すると称しつつ、大衆の論理—自衛的戦争の論理に拝跪する「党」へと転落し、原則主義者は、レーニン主義を、発展し得ず、レーニン理論をそのまま現実に適用せんとするのである。そして、現代革命の組織を、レーニン主義を止揚し発展しつつ確立するのである。

その意味において俗っぽくいえば現代修正主義、レーニン主義の教条—スターリン主義、現代革命へと分化するのである。

ちょうどかかる事態を同質に展開した時代を十九世紀後半から二十世紀初頭  
にみる事ができる。即ち、産業資本主義から帝国主義確立期において、帝  
国主義の評價、マルクス革命論の評價、そして「革命を闘いとする組織」につい  
ての国際共産主義運動史上根底的な分派斗争が展開され、結局、ロシア社会民主  
党第一回大会における規約第一条の処理をめぐってボルシェヴィキとメンシェ  
ヴィキの衝突に到り、党内闘争から分派闘争に突入するものであった。  
トロツキはレーニンと革命の性格や展望において一致しつつもその過程を  
如何に荷うか、即ち「組織」の問題においてはマルクスの統一戦線と「前衛」  
の問題として、即ち革命を個人の能力の問題としか扱えていず、結果的には  
マルクス教条主義で、組織の問題は革命家を組織的に育成することに於て決定  
的欠陥を有していたのであった。

さて再び国際共産主義運動に於ける現段階の世界革命派の分裂の問題にかえ  
ろ。

「過渡期世界論—革命論—階級形成—党形成を媒介にしての組織の問題」、他

方では実践上の問題を通しての階級形成—党形成を踏えての「党と軍事」の自  
然成長性の克服としての「組織」が問われ、そのことは結局「党と軍事」の問  
題解決を媒介に「下からの自由分散的な、統一戦線党的な」党を考える部分と  
レーニンの組織原則を教条主義的に固定することによって大衆の新らた自然  
発生性を吸みあげられず、党内の混乱を官僚主義的に抑圧する、スターリニ  
ズムの党を展望する部分と現代革命の組織を展望する部分に分化するものである。  
現代革命の核心は人間の位相転換を媒介にしての、主体的能動的なものであ  
り、革命に向けての帝国主義的世界的打倒過程自身も同時に「世界プロ独—  
世界社会主義—世界共産主義」(人間解放)の創造過程であることに於て、革  
命は現実的に徹頭徹尾、世界的で社会的で、かつ暴力的である。

これ等のことは過去の受動的消極的な「党—先進的集団—統一戦線(大衆)」  
の連関を「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」に止揚せしめねばならぬことを  
意味している。ここから大衆の「一國性、非社会性、非暴力性、或いはそれ迄の  
コスモポリタニズム、コンミニオン主義、暴力主義、唯武器主義の矛盾を止揚  
し得る組織とはポリシェヴィキの「P.B.S.」全国政治新聞、少数精鋭の上か  
ら組織が踏えられつつ、

① a 国際部を基礎とする統一戦線部

ちょうどかかる事態を同質に展開した時代を十九世紀後半から二十世紀初頭  
にみる事ができる。即ち、産業資本主義から帝国主義確立期において、帝  
国主義の評價、マルクス革命論の評價、そして「革命を闘いとする組織」につい  
ての国際共産主義運動史上根底的な分派斗争が展開され、結局、ロシア社会民主  
党第一回大会における規約第一条の処理をめぐってボルシェヴィキとメンシェ  
ヴィキの衝突に到り、党内闘争から分派闘争に突入するものであった。  
トロツキはレーニンと革命の性格や展望において一致しつつもその過程を  
如何に荷うか、即ち「組織」の問題においてはマルクスの統一戦線と「前衛」  
の問題として、即ち革命を個人の能力の問題としか扱えていず、結果的には  
マルクス教条主義で、組織の問題は革命家を組織的に育成することに於て決定  
的欠陥を有していたのであった。

さて再び国際共産主義運動に於ける現段階の世界革命派の分裂の問題にかえ  
ろ。

「過渡期世界論—革命論—階級形成—党形成を媒介にしての組織の問題」、他

方では実践上の問題を通しての階級形成—党形成を踏えての「党と軍事」の自  
然成長性の克服としての「組織」が問われ、そのことは結局「党と軍事」の問  
題解決を媒介に「下からの自由分散的な、統一戦線党的な」党を考える部分と  
レーニンの組織原則を教条主義的に固定することによって大衆の新らた自然  
発生性を吸みあげられず、党内の混乱を官僚主義的に抑圧する、スターリニ  
ズムの党を展望する部分と現代革命の組織を展望する部分に分化するものである。  
現代革命の核心は人間の位相転換を媒介にしての、主体的能動的なものであ  
り、革命に向けての帝国主義的世界的打倒過程自身も同時に「世界プロ独—  
世界社会主義—世界共産主義」(人間解放)の創造過程であることに於て、革  
命は現実的に徹頭徹尾、世界的で社会的で、かつ暴力的である。

これ等のことは過去の受動的消極的な「党—先進的集団—統一戦線(大衆)」  
の連関を「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」に止揚せしめねばならぬことを  
意味している。ここから大衆の「一國性、非社会性、非暴力性、或いはそれ迄の  
コスモポリタニズム、コンミニオン主義、暴力主義、唯武器主義の矛盾を止揚  
し得る組織とはポリシェヴィキの「P.B.S.」全国政治新聞、少数精鋭の上か  
ら組織が踏えられつつ、

## II 萌芽的武装闘争から前段階蜂起—世界革命戦 争の過渡への同盟の歴史的試練、性格、課題

権力の秋の攻防に向けての侵略—抑圧—反革命の増大、なし崩しファシズム  
への権力再編攻撃にさらされるなかで現在、同盟は秋の安泰決戦を武装斗争と  
して闘かう前段階—準備期にある。

### (1) 国際階級闘争の現段階と同盟の位置

これは4/28の深刻な総括—我々の問題提起をも加え、武装闘争の実現が確  
認されたのであろうが、問題は、この段階に到達することに於て、過去の「武  
装闘争を闘かうか否か」の議論をも含め、この武装闘争を「如何なる性格で、  
如何に闘かうか」に煮詰まり、このことをめぐって、党内闘争が、公然と展開  
され、この段階に於て始めて、真に「理論と組織」の問題が同盟の死活の問題  
として登し上つた。そして、自己批判的に総括し留意すべき事は「武装闘

の組織構成員全体の「党と民主主義」をめぐる自然成長性を自己変革し得る組  
織として、全国政治新聞「P.B.S.」の内的交通様式として、上からの中央集  
権—民主集中制の少数精鋭の組織としてあったのだ。これらはロシア社会民主  
党第一回大会における規約第一条の処理をめぐってボルシェヴィキとメンシェ  
ヴィキの衝突に到り、党内闘争から分派闘争に突入するものであった。  
トロツキはレーニンと革命の性格や展望において一致しつつもその過程を  
如何に荷うか、即ち「組織」の問題においてはマルクスの統一戦線と「前衛」  
の問題として、即ち革命を個人の能力の問題としか扱えていず、結果的には  
マルクス教条主義で、組織の問題は革命家を組織的に育成することに於て決定  
的欠陥を有していたのであった。

さて再び国際共産主義運動に於ける現段階の世界革命派の分裂の問題にかえ  
ろ。

「過渡期世界論—革命論—階級形成—党形成を媒介にしての組織の問題」、他

方では実践上の問題を通しての階級形成—党形成を踏えての「党と軍事」の自  
然成長性の克服としての「組織」が問われ、そのことは結局「党と軍事」の問  
題解決を媒介に「下からの自由分散的な、統一戦線党的な」党を考える部分と  
レーニンの組織原則を教条主義的に固定することによって大衆の新らた自然  
発生性を吸みあげられず、党内の混乱を官僚主義的に抑圧する、スターリニ  
ズムの党を展望する部分と現代革命の組織を展望する部分に分化するものである。  
現代革命の核心は人間の位相転換を媒介にしての、主体的能動的なものであ  
り、革命に向けての帝国主義的世界的打倒過程自身も同時に「世界プロ独—  
世界社会主義—世界共産主義」(人間解放)の創造過程であることに於て、革  
命は現実的に徹頭徹尾、世界的で社会的で、かつ暴力的である。

これ等のことは過去の受動的消極的な「党—先進的集団—統一戦線(大衆)」  
の連関を「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」に止揚せしめねばならぬことを  
意味している。ここから大衆の「一國性、非社会性、非暴力性、或いはそれ迄の  
コスモポリタニズム、コンミニオン主義、暴力主義、唯武器主義の矛盾を止揚  
し得る組織とはポリシェヴィキの「P.B.S.」全国政治新聞、少数精鋭の上か  
ら組織が踏えられつつ、

① a 国際部を基礎とする統一戦線部

日本階級闘争の最先端を荷った全分派が、この問題をめぐって、三つの傾向  
に分解—再編されつつある事は周知の事である。我が同盟こそが真に、同盟の  
党内闘争を止揚し、かかる国際的—国内的な分派斗争に介入し、武装闘争(前  
段階蜂起)を実現する過程で、前衛党に飛躍する任務を有している。だが我々  
にも又、現実的に三つの傾向に敵に分化しつつあるし、これは当然の事  
でもある。かかる同盟を巻きこんだ(否まことに同盟を先頭とした)国際—国内  
的等質の党内闘争—分派闘争は、今日の意義こそをはきりつかむことから出  
発しなければならぬ。

の共産運動を覆い尽くしている現段階で、かつその解明を抜きにしては、武装中央権力闘争（前段階蜂起）から世界革命戦争、内戦を貫徹できない地点にある。④それ故、全ゆる革命のな党派と我が同盟も又、この問題に解答すべく格闘し、これは不可避に全ゆる領域において、マルクス・レーニン主義の止揚が問題にされ、そこから現代修正主義的傾向、ML主義の教化化（スターリニズム）の傾向を通しながら、現代革命派が、創造的ではあるが、未経験ゆえに無政府性をもって登場し、三つの潮流的傾向に分化するのである。それは最初、種々な色合いの、種々な組合せをもって整理しにくいものであるが、それは現段階において、今やはっきりとした傾向を持ち始めつつあるのだ。⑤勿論このことでもって、同盟の分裂や、分派闘争、「別党」が許されているわけではなく、その逆で、理論闘争・党内闘争の在り方の確立を通して、問題を根底から止揚していかねばならぬし、このことを通してのみ、真の前衛党は誕生するのである。

## (2) 第七回大会—第八回大会—現在

### (A) 科学的理論と「党と軍事」、党内斗争自身の自然発生性の克服

(1)で確認した、わが同盟の党内斗争の世界史的立場は、確かに現在三つの潮流的傾向、色彩をもって展開されている。だが、これは未だ、完全な潮流的傾向を固定しているわけではなく、我が同盟全体が、⑥ますます、この世界史的位置に立たされていること、これを前もって逆規定して把え、そのような方法でもって先験的に党内斗争、分派闘争を設定してはならない。又、部分を絶対化することも慎まねばならぬ。⑦何故なら、同盟は、他分派と異なり、同盟第七回大会に於て、旧マル戦派との党内斗争を通じて現代革命への接近の出発点を築いているからである。

即ち、岩田危機論に対しての過渡期世界論、一国的経済主義革命論に対しての世界同時革命論、階級形成—党形成論上には、自然成長的党建設論に対して（水沢階級形成）の党の独自活動を通じた意識的党建設論等、ほぼ全ゆる傾向を網羅した三つの現代革命への接近の拠点を獲得しているからである。

問題に無自覚であり、これを止揚する政治性・組織性を獲得し得てなかった。同盟総体が現代過渡期世界に於ける理論と実践（党としての闘争・組織戦術・党のため闘争）を、前衛自身の「党と軍事」に於ける自然成長性・無政府性を党の革命的党内生活—規律を契機に止揚する実践的世界観の獲得は旧ブンド崩壊過程とそれ以降、プロ通、革通、戦旗として分化し、未だ未止揚で、その後、第七回大会に於て克服の方向を獲得しながらも、昨年4/28斗争—6月斗争—全学連大会に於て、この問題を顕在化させ、かつ10/21—11/7—東大斗争は同盟が組織階級闘争の最先端に立ち、これを索引することに於て、「党としての闘争—組織戦術—党の為の闘争」の総体としての実践過程での前衛自身「党と軍事」の自然成長性—無政府性の克服の政治性—組織性—「党の作りなおし」を鋭く提起していたのであった。

勿論、これ等は組織的諸領域の深化（過渡期世界論、革命論、党形成論）を同時併行的に提起していた。だが同盟総体は問われている問題を、その総体性に於いて把え切れず、総体として啓蒙主義—大衆運動主義的傾向を帯び、同盟は個々の部分的、個別的的政治—組織性に潜在的に分裂せざるを得なかった。（方法的に、プロ通、革通、戦旗の個々からの革命的止揚を通しての同盟の再武装）。

かかる潜在的分裂の止揚は言うまでもなく前述した「前段階決戦—世界党—世界赤軍—世界反帝統一戦線」を政治基準にし、「党と軍事」の前衛自身の自然成長性—無政府性の克服の新たな意識的指針を内的媒介に、党の規律—その在り方の形式（内実は形式を帯びるという意味での）をテコに、その三つの傾向を止揚する方向をもつものであった。

4/28はかかる新たな政治性—組織性の未確立なままに（潜在的分裂傾向）取り組まれ、同盟の危機を表面化せざるを得なかった。

4/28は、①「前段階決戦、世界赤軍—世界反帝統一戦線、世界革命戦争」の革命的深化—豐富化—具体性を要求し、（なし崩し）ファシズムの規定—中央権力闘争の性格、位置、中央権力闘争とマッセントの連関—武装etc）②他方「党と軍事」に媒介される新たな前衛自身の自然成長性—無政府性の克服、これに中心基軸を置く「党としての闘争、組織戦術、党の為の闘争」の実態指針、③④⑤を総括する「党規律に媒介された党内斗争のあり方」

⑥それ故、今、同盟が連帯して、現代革命に接近する前衛党の飛躍を、武装闘争の準備や党変革—党のための闘争ではなく、この統一しての党内斗争の在り方を、原則を通して、即ち、武装闘争の準備、党内斗争のシブシブな進展が、党自身が自らの軍団をもち、自らが武装することに於て、武装斗争、党内斗争の一つのことが、「党と軍事」の決定的自然成長性、無政府性に媒介されることを、既存にある規律を守ることとして、自らを外的に縛ることに於て、逆にこれを内在化し、真に前段階蜂起—世界革命戦争—世界革命党の中核となることである。決して現段階に於て過渡期世界論（なし崩し）ファシズムの規定）、現代革命論、階級形成—党形成を踏えた党建設論—一般の独自の深化が要請されているのではなく（勿論、これ自体の個別的深化が必要である）前二者が三者に集中され、それも「党と軍事」の前衛自身の自然成長性の克服が党内斗争の自然成長性の克服の問題としてあることが党内斗争の原則の確立を通して実践的根底的に「党を作る」ところに集中されるのである。この点にこそ、現代革命の前衛主体の政治性—組織性—党派性—一切がかかっているのである。

勿論、史的唯物論—現代帝国主義論の確立を踏えた過渡期世界論の確立—及び現代革命論の深化は、それ独自で深化されねばならない。又これを踏えた階級形成—党形成論の内的連関の指定の上での、党建設論もより深化されねばならない。

何故なら、もともと、これ等の曖昧性こそが、秋の闘争を如何に把え、如何に闘うか々の意見の相異を生み出したのである。又、今後の69年以降の世界革命戦争との内戦の時代の我々の世界プロ独と党建設の導きの糸となるからである。

だが同盟が遭遇していた地点は、同盟が秋の闘争と党内斗争の深化と止揚に向け、同盟自身が武装を開始し（同盟が武器—軍団を所有すること）、現代革命の根本の問題—「党と軍事」に於ける、前衛自身の自然成長性の克服の基準（政治性、組織性）を、この過程を通して克服してゆくことであり、同時にこの過程を通して逆に過渡期世界論、革命論、党建設論等が、その理論主義的性質を越え、実践的により深まり、定立されるという地定であった。我々はこの

「同盟の革命的な前衛党の作り直し」を深刻に提起したのであった。これらの諸問題は、同盟において、その後秋の安保決戦と「党内斗争」の上、我々の反革命的行動とその傾向をもって、逆に突き出された克服の方向を見出しつつあるし、見出されねばならない。

### (B) 同盟の基本的政治状況

「上からか、下からか」「党と軍事、プロ通、革通、戦旗」さて、(1)(2)の項で、我々は同盟の遭遇している位置及び課題を明らかにした。

7/6を経て尖鋭に突き出された事態は、極めて深刻で根底的であることが、全同志に受け取られている。だが問題に尖鋭に根付くのであるが故に、その錯綜とした流動状況は、我々をも含めて、混乱せしめている。誰もが「今、何が展開しているか」について正確な理解を欠き、把握の基準を失っている。

何の価値判断もなく「左派」「右派」「中間派」だとか「東京派」「関西派」だとか、「政治過程論を乗り越えること」が基準だとか、或は「下から派と上から派」とか勝手に基準をつくっている。又論理的基準から小ブルルンプロ性とは全く非政治的、ブルジョアの基準まで持ち込まれ混乱を呈している。これは全くの同志がまじめな基準で、同盟を把えており、共通の価値基準が失なわれつつあるからである。

断つておろが、旧ブンドの克服を狭い「安保闘争の敗北」の視野から整理し、現在の現在の動向を位置づけることは、狭く、浅く、誤ちであり、これでは現状を決して把えることは出来ない。これ等には、それなりの根拠があり、一面、真理でもあるが、だが、全体の状況に当てはめた場合、全くの暗やみに入り込む。

我々は錯綜した同盟内状況を次の四つの観点から整理しなければならぬと思

①かかる事態の根本的発生の根拠は(1)や、(1)の⑥でも提出した如く、明らかに、秋の「安保決戦を如何に把え、如何に闘うか」という実践的課題の主体解明から起っていること。

②だが秋の武装闘争（やるか、やらないかを含んで）を「如何に把え」「如何

に闘うか」は決して、旧BUND挫折の解明の観点などよりも、はるかに高度で、創造的な(2)の④で明確にした如く、産業資本主義・帝国主義・現代帝国主義を機軸とし、疎外された労働者国家を産する現代(戦後以降)過渡期世界の革命の問題として、かつて全ての共産主義者が遭遇した帝国主義段階の革命を如何にやるかをめぐって、修正主義(社民)、マルクス教条主義(初期トロッキー、ローザ)、レーニン主義に、質において等質で、規模、性格に於ては、如何にこれをしのいだ現代革命の問題として「マルクス・レーニン主義を、如何に、止揚するか」が問われることからの、現代修正主義 M・L主義の教条化(スターリン主義(旧来のそれと別の色彩をもっているにしろ))、そして現代革命派が三つに分化する危機と、前二者の止揚が、問われていること。⑤そして、現代革命をめぐる三つの潮流の傾向を分ける基準は、様々な理論上に於て一致、不一致(様々な領域に於て、深化しているか否かは別にして)を持ちつつも、現代修正主義との分水嶺が、「上からの党造り」を否定し「下からの党造り」を肯定するか否かにあること。同盟は第七回大会に於て、はっきりとレーニン主義を継承し、「上から」と定めた組織基準をもった組織である。だが同時に、我々は、現代市民社会に於ける大衆の高次な自然発生性を吸みあげることに於て、理論上、組織上に於て、不十分であることから「上から」「外から」ということが、単純で、即自的な場所としての「上から」になりがちで、「内部からの」上から「外からの」の指導性を喪失させるところから、場所に於ける「内部からの」外からの、上からの指導性を強調する傾向を、あたかも、修正主義者の「下から」の組織造りを二重写ししてはならない。この点、中大支部は、多分に、一面に於て、誤解されており、彼等の革命的献身性に断つておかねばならぬ。

かつ松本一三上同志を中心とするグループが「内部に於ける」「外から」「上から」の指導の問題意識とが二重写しになりつつも、大衆の自然発生の論理の延長線上に「党を作る」傾向を濃厚に有していることも、はつきり断つておく。これは同盟関西地方委にも、濃厚に、体質的に残存するものと思つて④さて、問題の深くく性は、第七回大会で「上から」の党を作る路線が承認されつつも、政治闘争、個別闘争、中央権力闘争、MST、前段階蜂起、ソノヴィエト運動、如何を問わず、萌芽的端初的武装闘争の段階から、本格的武装

世界革命戦争、世界赤軍―世界革命戦線―の理論的結論に於て一致し、かつ「党としての闘争・党のための闘争・組織戦術」で一致しながらも、その形成過程に於て、プロ通派の革命的止揚、革通派の革命的実践、戦旗派の革命的止揚をめぐるとする部分に於て、接近の方法が違え、実践上においても相違したり、疎通したりしない事態は、正に自覚的に「党と軍事」を媒介した指導―被指導の問題を無自覚で正しく処理しえなかつたことに起因すると思ふ。この問題を通してこそ、過程主義、革通主義、立場主義云々のレッテルは止揚されるであらう。

若干まとまりのない書き方であったが、結論的に上からの党建設をめざしながらも、「党と軍事」の問題に対する対応をめぐって、これに媒介されながら党建設の対応が、プロ通的、革通的、戦旗的傾向の分化がある、ということである。我々以外の、プロ通・革通・戦旗云々の傾向が安保BUNDの敗北の止揚にしか価値規準を置いていないことにこそ、根本的に問題があり、混乱の要因になつていたのである。

10/8以降、ゲバ論争が絶えず、昨年春、SSU赤軍論が、直感的に提出され、ゲバ論争がある毎に、過去と次元の違う諸問題が登壇し「軍事力学主義」が価値規準をもたず使用され、「何か武器や軍事技術を語る」と、それ自体が非マルクス主義であると思ひこまれて、或いは、唯武器主義の内実が、萌芽点に点検されたりしつつ、昨年10/21の「防衛庁・火炎兵」論争と防衛庁ゲバ突入闘争は項点であり、同時に「火炎兵」論争その未貫徹は火兵―武装闘争への飛躍がその「政治組織性」に於て「党と軍事の矛盾を永続的に止揚する」に飛躍し、その組織の転換が必要であることを示していた。これは、単なるこれ迄の科学的理論一般の深化ではなく、この深化が政治性の質と組織の転換と結びつかねばならぬ問題であり、即革命理論が「権力問題」と「世界革命戦争」の次元で発展され、「党と軍事」に媒介された「組織の作り直し」とし、獲得されねばならぬ事を意味している。この事を総括しえぬままの11/7と12/12の東大闘争は、この限りで敗北すべくして敗北していたのである。東大安田闘争も、これに応えるものではなかつたが、この質は自然発生的のにはあれ、全党派が結集したという意味で獲得されつつあった。

闘争(前段階蜂起―世界革命戦争)への突入の段階で、階級形成―党形成の未指定と「党としての闘争、組織戦術、党の為の闘争」の主体的組織論の未確立からの相当の混乱を含みつつも、(この次元に於ける問題が政治過程論に於ける「党建設」の問題であるが)「真に自然発生の武装闘争を、目的意識的な武装闘争に如何に転化せしめるか」「その為の組織を如何に作るか」「その組織の質、同盟員の政治性、組織性、党の組織形態は何か」に應えきれず、場所としての「下から」も「上から」も、上から意識的な武装闘争に組織しえていないことである。

普通、党は、斗い取られるべき革命の性格から規定される。と同時に、その性格から、規定される諸階級、諸階層の大衆の動向―自然発生性が如何なる状態であり、如何なる方向に発展するかに指定された目的意識的統一戦線の中で、党と先進的集団を媒介にして、党派斗争を通し、大衆の自然発生性の克服と階級形成を促進するところからの、逆に、大衆の自然発生性が「革命」の論理をもって、組織に流入し、ブルジョアの諸傾向を育てるのに対し、これを前衛自身が克服する革命論を基礎とする実践の指導―被指導の領域に於ける、自然発生性―目的意識性、或いは、矛盾の環を獲得することからの党内政治生活の質から、両面から定められる。このことは現段階とそれ以降、急進的に階級生活に於ける闘い、過去前衛自身の自然成長性(正にこれが環である)の党内生活に於ける闘いからの(過去帝国主義段階では、普遍的に、この問題であったが)過渡期世界の前段階蜂起―世界革命戦争の成熟期にさしかかりつつある段階で、階級闘争が「民主主義政治」から、革命戦争等を団結形態とする武装闘争政治―戦争政治に転化することによって「党と軍事」の永続的矛盾の環を発展転化しつつあることに於て、理論上、前衛自身の組織性、政治性(体質)―組織性格が党風に於て対応しえていないことにある。

普通、理論が、指導―被指導の運用に於て経験を超えた科学性を与えたと同時に、逆の反面、指導―被指導の実践を媒介に理論そのものが実、実践の科学性を帯びるものであるが、これ等は常に、指導―被指導に於ける環を媒介にして成立するものである。この環を媒介にして、如何に指導―被指導の正しい在り方を確定するかで、前衛の体質(政治性、組織性)も決定されるといって過言ではないだろう。「上からの党の建設」そして「世界(国)同時革命、階級形成の脆弱性が斜断されたことであらうか。

第八回大会は「権力―世界革命戦争問題」「党と軍事」「組織の作り直し」の実践の根幹問題が総括されないまま、敗北を戦術的に闘ったこと自体(斗争)に於て、組織が損害を受け、一時的に孤立する場合があることは極く当然のことである)に原因があるかの如く総括され、その結果、現象の欠陥だけがあげられることに於て、主体的総括が抜きにされることによって、④過渡期世界論、世界同時革命が極めて、立場上の問題、そして、その悟性主義的深化として、現代帝国主義論争が危機論主義的な、革命論的性格に転化し、「権力再編―権力問題」としてではなく、あげくには、経済学一般的の深化に終り、⑤世界―国統一戦線の主体を軸に「前進―後退の総括の問題が、スターリン主義の裏切り、社民の反動家のせい」にされ、「突出が孤立を生み出す」という待期主義的階級関係論と職場主義による克服へと帰結されていったのである。⑥全共闘運動、第三期地区反戦運動、地域階級の労働運動、産別左派獲得―産別左派、フラク強化、ソヴィエト運動も提起者の思惑はともあれ、客観的には、危機的労働運動主義的、サンチカリズムの突破へと連なり、結局、党主体の側からの総括は、真になされず、前述した、啓蒙―イデオロギー主義的な性格に解消されていったのであつた。勿論これは、同盟が「上」から「政治的」な主張する余り、場所的「下から」「内部から」の指導性に於ける脆弱性を物語るものであり、その個々に於て、解決の道を提起するものであつた。

以上の啓蒙主義的、イデオロギー主義的、実践的には右翼日見主義的な第八回大会路線は、東大闘争に於て、P・Bの指導性も発揮しえず、4/28に於て、完全に破産し、その後の同盟の危機、現在の価値観に於ける分裂」を呈するものであつた。

他方、都委員会を中心にし、共済結都委員会の中央労働者組織委の改組、書記局軍事委の活動強化等を基礎に10/21―11/7を「権力問題」「党と軍事」「組織の改組」を直観的に総括し、4/28に於て党直轄の突撃隊、労働者反戦部隊のゲバ行動隊―大衆ゲバ隊等、労働者武装体系の追求がなされていった。

又、学対は第八回大会路線に対して、直観的に不満を感じつつも、問題の核心を総括しえず、綱領獲得―組織戦術の欠落として総括し、問題の積極的解明と克服の方向には至らずとも、戦旗的傾向の良い側面を対応したが、東大闘争に於て、全力をあげた闘いを展開しつつも、同盟全体の団結とP.Bの指導性の欠落から、戦斗の最良の同志連を獄中に送ることに於て危機を形成したのである。

全学連大会に於ける4/28の実践上の立ち遅れは、P.Bの指導性の問題を同時に、学対独自の戦旗的傾向の悪い面としての「党としての闘争」に於ける無方針的傾向を露呈したのであった。機関紙局は、現代帝国主義の解明による党建設を問題意識にしたが、実践面に拘り切れず、その追求も結果として、小ブル経済学者分野に城を明け渡す傾向になったのであった。

10/21―11/7、その後の「学園闘争」を革命的に開いた中大細胞や、又三多摩地区委も同様に「権力問題」世界革命戦争問題、「党と軍事」、「党の造り直し」改組の問題として、後退の意味をたて切れず、場所的「下」「内部」の「外」から「上」からの指導性の欠落、かつ総体としての上からの指導性の脆弱性を、「上からの党造り」そのものの誤ちとして、総括する傾向を生み落したのであった。又関西地方委は、八回大会の経緯すら把めず、根底に、問題に接近しようとせず、従来からの政治過程論―組織日と見主義の体質故に、調停主義的政治に一役買っビエロの醜態さへと、その質を変質させていたのであった。

そして、その政治過程論の大家と結合し、階級形成してゆくこととする良い側面は、かかる党的総括を抜きにし、無批判に受け容れることによって、地域階級の労働運動、全共闘運動等の指導が、当然にもサンディカリズムの性格を内包せざるを得ず、「共青造り」「4/28」に一定の後退を余儀なくしたのも理由のあることであり、機関紙マンパの不定―党建設の立ち遅れ、関西学対からの不満を受けとめ切れなれども、これに原因を置くのであった。我々は八回大会に集中される過程で、この路線に反撥しながらも、問題を深く解明し得ず、その右翼日和見主義的傾向を指摘する程度に反撥の次元にとどまり、消極的党内闘争しか行いきれなかった。このことは、10/21―11/7―12月東大闘争を最も同盟の先頭につけて闘いながらも危機の突破を、「世界革命戦争―権力問題」

らだ。その限りで、二中委は実り多いものであったのだ。

かかる意味で、第八回大会は同盟の問題点、①世界同時革命の現代帝国主義を機軸としての深化、②階級闘争の再編期での同盟の運動を通した位置（階級関係論）、③党の為の闘争―組織論上の深化を獲得しはしたが、にも拘らず、決定的な実践上の10/21―11/7―12月東大闘争の後退を世界革命戦争―「権力問題」「党と軍事」の造り直し「党の改組」を実践的媒介点として発展せしめることに於て全く無自覚で、これを回避した問題の克服であるが故に、④右翼日和見主義的路線に転化し、その事態に於て、啓蒙主義、イデオロギー主義と経済主義、大衆運動主義に武装解除するものへ、変質してゆかざるを得ない性格であるし、そして同盟内政治において、ブルジョア的閉じ込み、とり引き、官僚主義的政治を育成してゆく性格のものであった。

かかる同盟中央の第八回大会の非実践的左翼日和見主義路線の破産は、4/28闘争の取り組みと、その総括に於て明白になったのであった。これ等は、取り組みの過程で、P.Bと学対（非実践的官僚主義の傾向を既に、持ちつつあった）及び中央労働者組織委の残った実践上の総問題（4/28の位置づけ、統一戦線、指揮者、突撃隊、労働者の武装、戦術、武器、組織体制、共青の位置、地区と学対の関係、学対と青対の関係、或いは、組織の型）に於て、政治的組織的意見の食い違いと、その非実践性の区別を鮮明にしたのであった。そしてこれ等は、初期のイデオロギー主義的勝利の総括に比し、学対―中央委の実践的敗北の総括の相違になって現われた。この時点以降、暫くにして、事態の核心が「世界革命戦争―権力問題」「党と軍事」「党の造り直し」「党の改組」を浮かび上がらせ始めたのであった。勿論、最初、漠然としたものではあれ。そして、同盟の中央委はこの問題を媒介にして総括する傾向、無媒介にして総括する傾向とに分化しつつ発展する分岐であり、同時に、秋に向けて、「如何なる性格で、如何に闘うか」が同盟全体の焦点の課題となっていく時点であった。

### 〈C〉 政治局、C.Cの指導性の喪失と官僚化―二つのプロト

同盟中央は、機関紙4/28シリーズに於て、4/28総括と、党的には「理論の深化」として、他方では、大衆闘争の基準に於ける前進（再生産論―統一戦線論、かかる性格で党からの総括の視点は弱）、及び党建設に於ける「破壊法

「党と軍事」「党の造り直し」改組」の根幹に据え切れなれども、一般的無媒介的なプロト改革―戦旗主義の止揚―それ故、イデオロギー主義的な止揚にとどまることに於て、実践的な「党の為の闘争」「党としての闘争」に於て分解し、拡散し、何か一切の連帯がないものとして、相互の分裂―批判を開始したのであり、それ故にこそ、党大会は、一定の反撥反対派の領域を出るもではなかった。

だが、右翼日和見主義路線の理論的根拠が、①「仏恐慌を媒介にした世界恐慌―日本革命（それまで日本は強い）」への危機論型、タイプ論の帝国主義論に依拠した待期主義的戦略への「世界同時革命―侵略、抑圧、反革命に抗し、世界革命へ」に内包する主体性・攻撃性・能動的な性格は、骨抜きにされたの变革、②かつ、中央権力闘争の精算的傾向としての世界革命戦争―権力問題への接近の方向を指象した「宣伝」と「パトロ」とそれへの位置付けの變更、「上から」「外から」の場所的「内」と「下」からの実践問題への指導性の確立への未解答を、「社会的再編と闘う必要」―「職場闘争押し下げ、街頭ブネルだけでは駄目」に「一般化」「俗流化」―「問題の本質の押し下げ」、それがその後の第三期地区反戦M―地域階級の労働Mの荷い手と性格をも決定すること、かつ③党建設問題が、これ等の政治的内容に支えられ、その意味で内容抜きに「敵し、情勢下」に耐え得る「学生」党ではなく、「労働者の党」が語られ、その内容たるや、一般的「綱領上の深化」として過渡期世界論（経済学、史的唯物論）の学者主義的規定字に昇天し、神棚に「理論委員会」は祭り上げられてしまふ性格のものであること。

だから、真に闘った者が、分解し分裂するからと言って、党内斗争の回避―組織日と見主義は許さるべきではない。正にこのことこそ、主体的には、現在の同盟政治状況は根源を置くといっても過言ではない。さて、このような高度で実践的政治領域の未解答、未止揚は三月二中委に於て極限に達し、同時にその否定的要素を、「権力問題」なし崩し「フアジズム」「4/28武装闘争」反帝統一戦線の重層強化が議題にのぼされた。だが二中委は、啓蒙主義的立場的な「世界同時革命論」の規定に時間を費やし、これを深刻に討議することが出来ず、P.Bは、この議論を深化する時間すらも考慮し得なかつた。何故なら、P.B総体の「党を作る」価値観が立場の規定にあつたか

↓弾圧―弾圧に耐えられる党」として、空論的に語るのみであった。秋の方針は、それ故、全くあいまいな「連統的中央権力闘争」を「計画としての戦術」で貫徹するといふものであったが、何んらの実践的（「権力問題」「党と軍事」）「党の造り直し」「党の改組」質を有するものではなかった。P.B―中央のイデオロギー―集团的、官僚集团的傾向への転化は、P.Bの総括と方針が6/8 A S P A C 闘争の推進過程での指導性の崩壊の中で始まった。6/8 A S P A C 闘争を経て、それ故、P.B―学対―機関紙等、中央機関の停滞のなかで、同盟総体は、大きく三つの傾向へと潜在的分裂を深めてゆくのであった。同盟書記長の出獄をもって、中央の停滞―官僚化の促進と一体に同盟総体の三つの傾向は、個別的様相を呈し、それ迄の政治的対立が組織的対立へ転化する過渡期に突入するのであった。ここから、不可避に機関に於けるヘゲモニー争いが開始される。ここから、最も根本的な、同盟員相互にとって「政治問題と組織問題の連関」に於ける党建設上の根本的態度が問われるのであった。全同志に党内闘争―党建設に集中される政治問題の組織問題への結合と集中の段階で、前衛自身の自然成長性、無政府性は根本的な意識性、組織性に於て、克服されねばならぬ段階に到達したのであった。又、党内対立に潜む党派性―革命性の基準が組織問題―党内闘争の在り方に発揮されねばならなかったのである。

かかる事態を、根底的に解決する方向は正に政治問題が「組織問題と一体であるなかで党内闘争の在り方の確定」にあるところの政治問題である性格に於て、普遍的に併存させる対権力闘争と党建設が二元論化し、「党が革命されねばならぬ」ことに於て、党内闘争―党建設が根本的であると同時に、普救に地上から遊離し、観念化し、宗教運動に転化する可能性に於て、革命的左翼の任務は、徹頭徹尾、地上的に対権力、地上の階級斗争の反映と、その克服の問題として、かかる方向と実践を媒介にして、党内斗争―党建設の方向が確立されねばならぬ。

とりわけ、今秋の武装闘争を前にして、巨大な階級関係―階級闘争の自然発生性が党物神崇拜の自然発生性をもって、激烈に発現する段階で、徹頭徹尾、前衛自身の自然発生性の克服が要求されるのである。

このことは何も「対権力闘争の方針争い」と実行能力を争ええはいいという事ではない。このままつき進めば、「組織上の対立―分派闘争」として理論―

党の狭い意味でのマルクス理論を理解して、実践的に解党主義につらなるものである。この地点で、党規律規則を踏まえ、媒介し、これを存在化し、方針と実行能力が争えなければならぬのである。勿論、これは前提である。正しく前衛は、この「方針と実行能力」に内包されている「党派性、革命性」を党建設上の次元に引き上げ、把え直して、かかる媒介過程をふんで、党内闘争が進展させられなければならないのである。又、これ以前の「理論闘争」権力闘争に対する方針の実践化、この普遍的次元への引き上げと、把え直しを通じた党内闘争―党建設―党としての闘争の実現」のサイクルを理論闘争一般の次元にとどめる事は誤りであり、マルクス主義理論自身の根底的無理解にこそある。毛沢東の提起している「敵対矛盾と人民内部の矛盾の關係、人民内部の矛盾の正しい処理とはかく把握されねばならない」。

このことは、党内闘争―分派闘争に於て、普遍的な原則であり、特に過渡期世界に於て人民内部の矛盾が根底的で爆発的で武装力をもって争えられ(産業資本主義、帝国主義段階と次元を相連する)、前衛自身の矛盾―党と軍事をめぐると自然発生性、無政府性が発現する段階で、極めて留意されねばならないのである。

とりわけ、武装の開始を事件とした党内闘争―党派闘争に於ては、そうであり、スターリン主義が理論の対立―理論―実践上の対立の立場ではなく、最後通告の官僚統制―前衛自身の変革ではなく、肉体的手段による変革そのものの条件を喪失させる事が組織化している地点で決定的である。

だが、同盟中央のプロ通の「安保斗争の現段階と、党建設の焦眉の課題」は正しく党内斗争の在り方を示す性格ではなく、極めて官僚的性格のものである。

何故なら、第一に、第八回路線の「帰結に於ける正しさ」にもかかわらず、階級斗争の転換が呼び起す「世界革命戦争―権力問題、党と軍事、党の造り直し」の改組に、応えきれない所からの、実践路線に於ては、右翼的傾向を内包せざるをえなく、この事が4/28に於ける同盟の一定の後退と、その後の混乱を造り出した総括をされないうまま、第二に、それ故、何んの明確な基準をもたないまま、秋の武装斗争を断固やるかが語られ、第三に、何の基準も持たないまま、「左右の日和見主義」のレッテルがはられ、第四に、軍事委の処分問題が提出された同盟中央は、かかる性格で、6/8 A S P A C以降、当面同盟の潜在的分裂過程に対応せざるを得なかつたのである。

いま「左右の日和見主義」のレッテルがはられ、第四に、軍事委の処分問題が提出された同盟中央は、かかる性格で、6/8 A S P A C以降、当面同盟の潜在的分裂過程に対応せざるを得なかつたのである。

6/8 A S P A C斗争を経ての、同盟内斗争と潜在的分裂状況の深化に対して、正しい党内闘争の在り方が問われつつも、だが、かかるプロ通「安保闘争の段階と党建設の焦眉の課題」が同盟内理論闘争を官僚的に抑圧し、同盟総体を自由活発な論争を通して引き上げる業を疎外したのである。

正しい党内闘争の在り方の最も実践的基本問題は、まずもって、同盟の上から問題の解決としての、③第三Cを開催することであり、それに向けて在関東協議会の恒常化であった。④かつ、同盟内論争紙をもうけ、全同盟の組織討論を開始することであり、⑤第三に、各級機関に(とりわけP B、機関紙)に於ける同盟内意見の論争を正しく反映し、機関の立場と同盟員個々の立場を正しく区別し、統一することであった。

他方、理論闘争―権力に対する実践を貫徹する為には、一定の組織闘争を媒介しない限り、不可能な事態(若し、同盟がよく、理論的、実践的、組織的指導性を發揮するならば、別のことであるが)を引き起していったのである。

かつ、党内フラクから党内分派的性格に転化する事を通して、一層、そのフラクから過渡期的分派的性格のフラクの(政治性―組織性)―組織性が決定的に問われ始めたのであった。

これらの事態を、最も正しく反映したのは6/23の学対、支部代、同日の中央労働者組織委であった。中央労働者組織委は、プロ通の評価、①第八回大会以来の総括の欠陥、②安保決戦に対する革命的階級的立場の欠陥、③秋に対する「戦術」の原則のアイマイ性、④官僚的性格をもった処分方法の無原則性、と評価し、①P Bの事情説明、②問題のC C―大会による解決、③それに向けてのP Bの立場の区別と統一の要求を表明した。だが同盟中央はこの要求を拒否し、「分派」という決めつけで処理せんとしたのであった。

正に4/28 A S P A C闘争過程での理論闘争の段階が、組織闘争の段階に、自然発生的に同盟総体をして突入せしめる契機こそ、プロ通は作り上げてしまったのである。

だが、全通闘争の過程は、同盟総体の正常性を發揮して6/27集年―28闘争をめぐる前衛自身の二重性とその自然成長性の止揚が問題にされ、その最終的総括として、党内闘争の「党と軍事」に媒介された自然成長性の克服に行きついたのであった。

第三に、第八回大会路線の受動的路線を克服し、過渡期世界の攻撃的能動的な前衛主体として、我々を鍛えあげない限り、不可避に、我々には三つの潮流的傾向に、自然発生的に分裂し、権力に介入され、「革命の利益」を損失させること。

第四に、それ故に以上の総括に従って、第九回大会の根本的任務とは、第一に、④⑤⑥の問題に解答を与えるのは過渡期世界論を単に過渡期社会群と帝國主義世界の併存、資本主義時代から世界プロ独を境界線とする資本主義時代から社会主義時代の過渡期と抱えるだけでなく、この時代が帝國主義の決定的な腐朽性、寄生性の拡大を内的根拠として、ロシア革命成立を契機として、プロレタリアートが貧民から近プロ(組織への道のプロ―組織されたプロ)を経過しつつ、今、攻撃的な世界武装プロレタリアートとして成熟しつつある事、それ故、④この能動的攻撃性の中に内包される、より高度な自然発生性と、目的意識性を指導する党のヘゲモニーの問題として、綱領的意志一致を獲得しなければならぬ。⑤この上に立って、④⑤⑥に解答を与える事。⑥以上をふまえて、安保決戦(前段階)に対する「党の為の闘争―組織戦術―党としての闘争」を確立する事である。

## 我々(赤軍派指導部の中央委)の総括と任務

①我々の自己批判的総括の段階は、今④世界革命戦争―権力問題、⑤「党の造り直し」―「党の改組」を4/28の総括から6/8 A S P A Cの時点に於て、自覚しつつも、にもかかわらず、⑥「党と軍事」の前衛自身の自然成長性の問題、⑦党内闘争―党派闘争の自然成長性の克服にある。

そして、これらの④⑤⑥の問題は、再度、問題の所在が、過渡期世界―攻撃的階級闘争に於ける「党」の問題であり、第八回大会路線の克服の問題にある事を自覚せしめている。総括は、それ故、第八回大会後からなされねばならないと思う。

争を正しく乗り切つたのであった。にもかかわらず、プロ通(1)を発射点とした同盟総体の無原則的、自然成長的党内闘争の進展は、その後、7/2プロ通において、決定的にこれを固定させてしまったのである。

①一切の政治理論に対する、前進的内容の呈示の欠落、②科学的資料に基づかない独断的「赤軍派」への分派的対応、③党内闘争の正しい在り方の捨象と、支部代、地区代同方式の採用、④物理的粉砕も辞さず、という最後通告主義こそ、このプロ通であった。しかも、このプロ通(1)は、我々の手に7月4日夜に手渡されてきたのであった。この事こそが、7/6の自然発生的な「党と軍事」の矛盾に媒介された決定的な党内斗争を現出する機軸となつたのである。問題を結論的に整理し、同盟の問われている課題を提示すれば、こうである。

第一に、第八回大会において、根本的に10/8以来の自然発生的武装闘争を目的意識的武装闘争に組織する指導が問われていた事。しかも、これは単なる目的意識的武装闘争ではなく、過渡期世界に於けるプロレタリアートの成熟段階を踏えた。党に於ても、④「世界革命戦争―権力問題」⑤「党の作り直し」階級⑥「党と軍事」に於ける前衛の自然成長性の克服、⑦党内闘争―党派闘争に於ける過渡期世界に於ける矛盾を止揚した原則の確立に解答を与えねばならぬ攻撃的な武装闘争であった事。

だが、第八回大会は、④世界同時革命、⑤階級関係論、⑥党の質的強化―党のための闘争の核心的帰結を提示しながらも、これを現代過渡期世界の④⑤⑥⑦の攻撃的目的意識性の環を媒介にして、解答を与えきれず、④⑤⑥⑦を捨象することに於て、或いは、これに無自覚であることに於て受動的(レーニン主義)意識性に於てしか、応え切れず、実践的には、啓蒙主義、イデオロギー主義と大衆追従主義の傾向を形成する路線を確定していたこと。

第二に、この第八回大会―受動的経路こそが4/28に於て危機を形成し、その後の党内闘争を規定しているものであった。即ち、4/28前後に於て、世界革命戦争―権力問題(なし崩しフランス、前段階峰起、武装e.t.c)、その後共産主義突撃隊の建設―S S Lと共責、軍事委e.t.cの位置付け、或いは、非合法の問題をめぐる党の根本的「造り直し」―改組が問われ始め、「党と軍事」

その前に、或々が自己批判的に総括すべき内容について、把え直してみよう。

②その前に、一応断っておきたい事は、或々に対して、政治過程主義「党内」方式「分裂」別党」の組織路線をとっていたという批判がなされているが

残シや傾向が指摘されるにせよ、決して我々がこのような事に於て、結果し組織路線をしいたわけではない。

問題は、同盟を包んだ「危機と克服」の方向が余りにも巨大で深くであることに於て、現代革命と現段階の段階から出発しながらも、我々の体質が「革命理論」組織」に於ける革命理論による政治的結果でありながらも（それ故、狭い意味での、組織論を含まない意味での革命論の相違）分派闘争「別党ではない）、八革命論」組織」という性格が現代過渡期世界のプロレタリアートの成熟に規定されて、より高次の「党と軍事」の前衛自身の自然発生性の克服、党内闘争のより高次の自然発生性の克服に媒介されない限り、我々をも含み、否我々も理論的総括を形成しているが故に、我々を先頭にして全同志が、過去のレーニン主義の教条化「スターリン主義、軍事力学生主義、解党主義、無政府主義に陥ち込む性格に於て、無自覚で武装解除していたことであった。

④我々は自己批判要求「階級的批判」当効同志の革命的変革が、如何なる基準をもか、に於て、全く武装解除していた。そして我々は普通一般にスターリン主義、日共の伝統を受けつぎ、伝統化している、リンチに於て、これを見出したのであった。

とりわけ、軍事の対峙と我々の自身が武装し、「党と軍事」の理論を克服する政治的意志一致や組織的克服の方法が獲得されていない特殊な緊張をこえ、環境とその段階で、我々にはこれに無自覚のまま、伝統的な方策に拝跪したのであった。

我々は「相互批判」自己批判」が要求される場合、それが党建設において決定的に必要とされる場合（「革命をやる」にはまず「党が革命されねばならない」段階に於ても、一見、革命「プロレタリア人民の利益よりも、あたかも党の利益が優先されるかの如き、前衛自身に転倒した認識を与える場合）に於ても）に於て、その当効同志の、その当効の誤ちが、権力に対する味方階級の混乱「

後退」誤ちの要素に於て解明され、その誤ちの奪還を権力に向けて組織されるよう批判されなければならない。

その意味に於て、その当効同志に対する強効は、肉体的制裁が自己目的化されるのではなく、権力との闘いに向けての自己変革が基本目標でなければならぬ。それ故、肉体的制裁「肉体的死（死刑）」の方向は決定的に誤ちである。

我々に於て、同志に対しての階級的批判と制裁は、キューバに於て、ゲリラ戦士が、誤ちを犯した場合、銃を取り上げられ、自らの武器を反革命兵士から奪ってくる事を学んだ。この制裁の原則性、思想性を総括しなければならぬ。

革命は革命党なくしては実現しない。かつ革命党は、階級形成の手段であると同時に、めざすべき未来「普遍を現実の階級闘争に媒介されつつ、確立する過程である。その意味に於ては前衛と前衛党は未来を対象変革を通じ自己変革していなければならない。

これは黒寛の「共産主義の人間論」永遠の今」では全くない。この事に於て、党内闘争は「革命の前に、党の革命をしなければならぬ」ことを通じて、我々を普遍に神に転倒させ、倒錯せしめる意識をも得る。だが問題の基本は革命であり、階級闘争の前進であり、諸個人の権力に向けての武装から開始されねばならぬ。

我々はこの事に於て、倒錯した事態に特殊な環境の中で、陥ちこんだ事を恥をもつて、自己批判する。我々は、勿論、リンチを自己目的化したものでは決してない。だが、自己批判「相互批判」の原則が、我々と赤軍派同志に於て、政治的に武装されていなかった事を認める。

④仏議長を権力から防衛し切れなかったこと。かつそれを契機に、同盟を破壊法攻撃にさらされたし、同盟の分裂的事態を反動的に固定したことも、その多くを「リンチ」に於ける、原則的基準の不明確性に無自覚に対応している性格のものである。

⑤このことは、毛沢東が述べているところの「敵対的階級矛盾に対して、人民の内部の矛盾が独自に存在し、人民内部の矛盾が正しく処理しきれない場合は、敵対矛盾に転化する」ことの証明である。我々は、議長を防衛しきれず「破壊法攻撃」反動的状況に我々内部の問題を

正しく解明し切れず、敵対矛盾に押しつけていった。（結果的にはあれ我々は同盟総体の危機と我々の敗北的事態を合理化すべく、仏同志の権力からの革命的奪還を試行しつつも、自然発生的に「問題の変質」別党コース」軍事の党」等々の混乱を呈していったのであった。そして我々全体を「戦争過程論」軍事力学生主義の」傾向が潜み、解党主義が発生していったのであった。

⑥ところで、これ等の事態は、我々の政治的戦争「過渡期世界論」攻撃型階級闘争「攻撃型党建設」の問題を「世界革命戦争」権力問題」「党の造反」改組」の問題にまで発展させているが、「党と軍事」「党内闘争」党派闘争の在り方」にまで発展し切れなかった事に多くを規定されている。

すなわち、過渡期世界に於て、帝国主義の腐朽と寄生性が増大すると、同時にプロレタリア、人民の成熟が、世界武装プロレタリアートとして到達し（このこと）一つが過渡期社会論の成立でもあるが、この到達段階の個々の性格に媒介されてプロレタリアートの矛盾が発現すること、すなわち、プロレタリアートの自然発生性と目的意識性が、帝国主義の打倒とこれを通じて、現に今から、世界共産主義「世界社会主義」世界プロ独に向けて、建設創造することに媒介されて発現することである。プロ人民は現代帝国主義の運動に規制され、導かれ、世界的に結合し、自らで武装し、自らを統治しなければならぬ。

それ故、人民自身を権力に対して闘うこと、これを経て創造することに於て、人民内部の個々の独自の本質が形成されたのであり、それ故に、その矛盾が権力と帝国主義国に向けて、正しく処理し切れぬことに於て、過渡期社会群相互の分裂にとまらず、国家的民族的利益のもとに武力衝突が国家に起り、内ゲバが資本主義階級内部でも軍事的対立として展開されるのだ。

→連派スターリニスト官僚、各国のスターリニスト官僚は正しく処理しきれず、敵対矛盾として考え、自ら自身を人民に対して、敵対的存在に変質せしめたのである。

「人民内部の個々の矛盾」は人民自身の新たな到達段階を踏えて、即ち、「攻撃型階級闘争」攻撃型党建設」を踏えて、「世界革命戦争」権力問題」「党の造反」「党と軍事」に媒介されて、敵権力に止揚されなければならない。この到達段階が踏えられない場合、敵に向け闘うことの意味自体も効力を失い、他方

で、歪んだスターリニストの内ゲバを発生させ、結局、権力の介入を招き、敵対矛盾に転化することによって、プロレタリアートと人民の革命の利益に損失を与えてしまっているのである。

④以上7/6と7/6以降の我々の行為と理論を自己批判的に総括すると同時に、同盟総体の危機が、根本的に10/8以来の階級闘争が第八回大会に於て、受動的に総括された事、これに根拠をもち、かつこれに対して、我々中央委が明確に過渡期世界論、攻撃型階級闘争から、「世界革命戦争」権力問題」「党の造反」「党と軍事」「党内闘争」党派闘争の在り方」を設定、この克服の方向に於て、党内生活をおくりきれなかった事を自己批判する。

補論Ⅰ  
スターリン主義と四中委議案

＜序＞ 同盟内闘争の現代的意義と四中委議案の位置

数ヶ月に渡って展開されてきた同盟内闘争は今や、7/6問題「四中委を疑る中で、その歴史的、世界的、普遍的な意義を明確にしつつある。それは4/28閣議総括と秋の安保決戦の戦術をめぐる同盟内闘争として開始され、7/6へ至る過程で、攻撃型階級闘争「世界革命戦争」前段階決戦「前段階階級闘争」と軍とソヴェイトをめぐる全面的な戦略「戦術論争」へ発展した。この同盟内闘争は、7/6問題「四中委を疑る中で、新たな段階「最終的総括段階」へ突入り、これを、九回大会の実現すべき課題として突き出した。

その第一は、スターリン主義の最終的克服の問題である。このことが、世界的普遍性を持つ理由は明確である。何故なら、我々の共産主義運動が直面している課題は、現代世界「過渡期世界のプロレタリアの変革であり、他方、スターリン主義こそ、この過渡期世界そのものによって疎外された共産主義であり、であるが故に、このスターリン主義の克服が前提とされたのみ我々は、過渡期世界のプロレタリア的変革の主体たりうるからである。この観点からした場合、我々の同盟内闘争が実現しつつある世界的普遍性とは、スターリン主

義の内在的・主体的根拠が、まさに過渡期世界に於けるレーニン主義の歴史的  
限界とそれへの無自覚故のレーニン主義の教条化に存在し、外的・客観的根拠  
が、通説の如く、ロシア革命以降の世界革命の敗北に存在するのではなく、ま  
さに、ロシア革命それ自体の敗北の中に存在することを明確にしたことであ  
り、であるが故に、スターリン主義の克服とは、主体的には、過渡期世界論を  
基礎・媒介としたレーニン主義の歴史的限界の止揚、ロシア革命を最高の歴  
史的到達点とするプロレタリアートの団結の質と形態そのもの変革としての  
みあることを明確にしたことである。

その第二は、戦術・戦術が自己変革を通じた階級形成の過程、対象変革、方  
法の対象化であり、であるが故に、これは、党の戦術・戦術として、党形成を  
媒介とした階級形成として常に主体的に把えかえさなければならず、従って、  
革命論は党組織論に於て、階級的諸実践は党形成の為の闘いとして主体的には  
総括されなくてはならないことに関する問題、党の為の闘いに関する問題であ  
る。それ故、前述の第一の問題、即ち、過渡期世界論を基礎としたレーニン主  
義の歴史的限界の止揚の問題は、レーニン主義の戦術・戦術の歴史的限界の止  
揚に止まらず、レーニン主義の党形成の歴史的限界を止揚する闘いとして完結  
されなくてはならない。7/6問題、四中委を経る中で問われてきた問題は、  
まさにこの党の為の闘いが三つの性格を有する闘い、解党主義との闘い、スタ  
ーリン主義の指導との闘い、無政府主義の傾向との闘いと要求されている  
ことである。解党主義との闘いとは、過渡期世界に於けるプロレタリアートの  
存在様式とそれに関連された自然発生性がレーニン主義の戦術・戦術・党形成  
の枠を越えるのに対して、レーニン主義の歴史的限界の止揚、新たな戦術・戦術  
党形成としてこれに主体的に対応するのではなく、この大衆の自然発生性に直  
接に拜跪し、旧来のレーニン主義の党の単なる直接的な解体として結果する傾  
向との闘いである。スターリン主義の党指導との闘いとは、過渡期世界のプロ  
レタリアートの自然発生性が、レーニン主義の戦術・戦術・党形成の枠を越え  
ているのに無自覚であり、レーニン主義の目的目的階級形成を追求するが故  
に、一方では、大衆の自然発生性に対する党の意識性の結合環をもたず、  
大衆の自然発生性に直接的な敵対を結果し、他方で、新たな党形成とこれを通  
じた大衆の自然発生性と党の目的意識性の結合(党形成階級形成)の新たな

環の設定に対する全面的敵対を結果する傾向との闘いである。この敵対は、我  
々への敵対、紅衛兵型、造反型党内闘争、党形成を媒介とした軍の建設、階級  
形成に対する敵対として登場したのである。無政府主義との闘いとは、我々内  
部に存在した傾向、紅衛兵型、造反型党内闘争、党形成を媒介とした軍の建設  
階級形成が、逆に党内に生み出す指導の自然成長性との闘いである。7/  
6問題、四中委を経る中で登場したかかる三つの傾向に対する目的意識的  
な党の為の闘いの展開と、それを通して同盟を過渡期世界のプロレタリア的変  
革の党主体に高めることこそ九回大会の第二の任務である。

さて、かかる同盟内闘争の意義と九回大会の二つの任務に照した場合、四中  
委議案に対象化されている同盟内の傾向「ヘゲモニー」は、まさに、過渡期世界  
に於けるレーニン主義の教条化としてのスターリン主義、スターリン主義の党  
指導に他ならない。であるが故に、それは、批判的・主体的止揚の対象である。  
所で、四中委議案は、④四中委の位置、⑤革命党と革命的闘争・綱領的視点  
の確立、⑥過渡期に於ける国際階級危機と世界革命への戦略的展望、⑦国際階  
級危機の前期的成熟と安保決戦、⑧同盟の質的飛躍を軍事と党の五部構成  
となつてゐる。それは、⑨は過渡期世界論、⑩は戦術、戦術、⑪は⑩、  
即、戦術・戦術の党からの把え返し、党形成階級形成として一応理解するこ  
とができる。

以下我々は、この批判を展開する訳であるが、その場合、既に述べた如  
く、この四中委議案に対象化されている同盟内の傾向「ヘゲモニー」の性格との  
連関に於て、次の二点を前提的に確認しておかなくてはならない。即、①②に  
於て、何故、③過渡期世界論④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝  
として展開するのかわらぬに、それを四中委「九回大会の真の課題」として  
突き出し、更に、何故、現局面の階級闘争が我々々にこのことを要求しているか  
を展開すべきなかに展開しえていない。それは、一般的には過渡期世界に規定  
され、特殊的には、秋の階級攻防「安保決戦」の性格に規定されているのでスタ  
ーリン主義は、まさに、過渡期世界に於けるレーニン主義の教条化としてのスタ  
ーリン主義の性格を有し、かつ、秋の階級攻防「安保決戦」に没主体的・客観主  
義的に対処していないが、故にこれら二点を当然にも理解できないのである。  
②③に於いて、戦術・戦術を党から把え返し、党形成階級形成の問題と

して展開しているが、新たな党形成階級形成の問題、彼ら流に言えば「軍事  
と党」の関係が、逆に党内に如何なる指導の自然生長性形成し、如何に  
目的意識的に展開すべきなかに展開しての性質。それは、まさに、秋の安保決戦  
ら、彼らこそ、スターリン主義的党指導の物質的「ヘゲモニー」の体現者であ  
り、新たに問われている党に於ける指導の連関、新たに問われている党に於ける指  
導の自然生長性との闘いなどは、そもそも理解する主体的根拠を始めてから有し  
ていないからである。この問題、紅衛兵型、造反型党内闘争「党形成と軍の建  
設」階級形成との連関、そして、無政府主義的傾向との闘いは、まさに我々が  
実践し、我々が陥ち入った誤謬であるが故に、我々のみが真に主体的に把握  
し、理解し、実践しうるものである。

### Ⅰ 秋に煮つまる権力闘争と同盟内闘争

まず第一に、何故、前述したが如き同盟内闘争「九大会の二点の課題が、我  
々に突きつけられているかという問題である。それは、まさに、秋の安保決戦  
へ煮つまる現局面の階級攻防の性格そのものに規定されている同盟内の傾向「  
ヘゲモニー」の諸君は、まさにこの現局面の階級攻防と安保決戦に没主体的・受  
身的にしか対応しえていないが故に、前記C点の課題と任務に関して、無理解  
で、あまいで、中途半端なのである。

我々は同盟内闘争を4・28闘争の総括と10・11月安保決戦の戦術として公然  
化した。そこに於いて我々は、67年10・8闘争をもって始まり、本年4・28闘  
争を転換点として、11月佐藤訪米へ至る現局面の階級攻防の把握を「攻防の弁  
証法」で大衆闘争の強弱及び国家権力の強弱として「転換点」で「権力再編」と権  
力闘争として提起した。大衆闘争の強さと同盟内闘争の弱さとは、国際反革命同  
盟再編「70年安保」と「IMF」国際通貨体制再編に媒介されたなし崩しブロッ  
ク化「統制経済化」に抗する大衆闘争が、日帝ブルジョアとして、現国家権  
力による支配の危機とそれ故の権力再編へと向かわせつつあるというところであ  
る。他方、大衆闘争の弱さと国家権力の強さは、日帝ブルジョアがまさ

に安保「国際反革命同盟再編」なし崩しブロック化「統制経済化」を基礎に権  
力再編をなし崩し「ファシズム」として実現しつつあり、かかる権力再編の前に大  
衆闘争が、自然成長的には権力闘争へと飛躍しえぬが故に、三者一体的に進  
行し、まさにそれに規定されて、秋の佐藤訪米をめぐる攻防は単なる安保決戦  
の次元を越え、攻防の弁証法「大衆闘争の強弱と国家権力の強弱の関係」に  
媒介されて、現局面の階級関係の中に内在する質、「転換点」で「権力再編」と権  
力闘争を全面化するものである。かかる認識の上に我々は、4・28闘争の総括か  
ら10・11月安保決戦の戦術を、権力闘争の展望の下に、蜂起とそれへ向けた共  
産主義突撃隊の建設として提起し、そこから蜂起を通じたソヴェト建設と二  
重権力状況の出現「安保」を、この蜂起は、権力奪取実現の蜂起と区別して前段  
階級起となる「党と赤軍」に索引されてのみ可能なソヴェト運動へと闘争を  
発展、拡大、深化されてきたのである。

所で、四中委議案に対象化されている同盟内の傾向「ヘゲモニー」の諸君は、  
かかる「攻防の弁証法」とそれに媒介されて攻防の内部から全面に押し出され  
てくる「転換点」で「権力再編」を理解しえず、秋の攻防を単なる安保決戦として  
固定的に理解していたし、現在もそうである。だからこそ彼らは、「我々は「秋  
を安保決戦として位置付ける。安保闘争のピークを70年6月の自動延長日にお  
いて」とらえる常識的思考に検討を加えた我々は、その無規定性、一般性を暴露  
した。70年安保の内実が、自動延長と沖組の日本共同侵略略前戦基地化にあり、  
これを通しての安保強化「アジア」核安保としてある時、我々は佐藤訪米「沖  
組問題解決」を、安保闘争に於ける決定的攻防として措定されずにはおれな  
い。佐藤訪米をめぐる階級攻防、それはまさしく、10・8以降の全闘争をかけた  
た安保決戦としてある「議案D」として、自己の常識的思考と安保闘争に対す  
る無規定性、一般性を、逆に暴露し、ニュース解説以下的な佐藤政府の政策解  
説を付け加え、安保決戦を連日なりたててゐるのである。その音声のかん高  
さにも拘らず、彼らは、自己が一度も生きた大きな大衆運動を指導した経験をも  
ちえない悲しきも手伝って、現局面の階級攻防に内在する「転換点」の質とそれ  
を全面に押し出す「攻防の弁証法」を、それ故、秋の攻防は安保決戦をもって  
始まりつつも安保決戦に終らず、権力再編「なし崩し」ファシズムの実現か、  
権力闘争への大衆運動の飛躍かの基調と力関係を決するものとして、言い換え

れば、階級決戦の始まりとして存在することに全く無自覚なのである。だからこゝで、彼らは、「同盟は、安保決戦Ⅱ階級戦線Ⅱ臨時革命政府樹立なる主観主義を粉砕した」(議案⑩)として安保決戦と階級決戦の間に万里の長城を築き、その後めたさに耐えかねて恥かしそうに自己弁護しつつ、「だが同盟は、安保決戦と階級決戦の間に万里の長城を築こうとするものでは断じてない。……同盟は、安保決戦の勝利と勝利を通しての階級決戦への進撃を追求する」(議案⑪)として、結局のところ、闘いを、安保決戦の勝利と勝利を通しての階級決戦への進撃、というふうな、二段階に設定するのである。それは、つまるところ、闘いを、佐藤政府の政策解説を論拠として、佐藤政府の枠内に、従って安保決戦の枠内に止めんとすることであり、彼ら自身、このことを認め、「安保決戦の性格は、単に我々の主体的決意によるだけであらう、安保のもつ客観的性格、現下の国際情勢等の客観的諸条件に規定されたものである」(議案⑫)として、全くの主体的決意もなく、客観主義的に闘いを直り、闘いの前進を追求するものに對して嘲罵を加える墮落を示しているのである。

以上のことから明らかなく、同盟内閣は、八四・二八闘争の総括と秋の安保決戦の戦術Ⅴをめぐる論争として開始されたが、我々と四中委議案に對象化されている同盟内の傾向の諸君とは、そこに於ける出発点そのものが違つていたのである。我々は、安保決戦の戦術を階級決戦から、権力闘争の展望から、位置付けて、△前段階階級Ⅴ、△前段階階級Ⅴを通して二重権力状況の開始とソヴィエト建設、△党と赤軍に索引されてのみ可能なソヴィエト運動Ⅴとして提起した。彼らは、安保決戦の戦術を、階級決戦・権力闘争の展開と切斷して提起せんとするが故に、△権力中核武装攻撃Ⅴ機能、何らの質的規定のない戦術を提起した。それへ向けた組織戦術もまた極めて機能的・軍事力学的主義的なそれとして、次の様に提起せざるをえないのである。「だが、四・二八を経て現在、同盟は、その革命的闘争論に、新たな内実形成を待ちとらねばならない。即ち、一般的には、前期的武装闘争から本格的武装闘争への発展・具体的には、△中央権力闘争とマッセストⅤのラセン的貫徹と全人民の武装・武装ソヴィエト運動の拡大をかちとるための、革命党独自の△鉄の軍団Ⅴによる上からの実体的物理的指導が要求されているのだ」(議案⑬)と。ここに言う所の△中央権力闘争とマッセストⅤとは簡単に言つて現局面の大衆闘争

と世界革命戦争、②現代帝國主義國家、なし崩しファシズムと前段階階級起、③党と軍事、の問題である。

## Ⅱ レーニン主義の限界とその止揚

四中委議案は、過渡期世界の規定を次の様に行なわんとしている。「一九一七年ロシア革命、一九四九年中国革命等に、全人類の1/3が資本主義から離脱することによって、現代世界は、過渡期世界論の構築を我々に要求している」(議案⑭)として、三プロック論(先進國、後進國、「労働者國家」ないしは、二プロック論(先進國と後進國Ⅱ資本主義社会と「労働者國家」)から過渡期世界の把握を開始する。そして、次に「労働者國家」の分析を始め、「しかも資本のくびきをたち切つた過渡期社会が帝國主義の包囲をうける中で、変質の可能性を与えられ、この可能性がスターリン主義によって現実性に転化させられ」(議案⑮)たものとしてこれを規定する。更に、この「労働者國家」をマルクスが「ゴータ綱領批判」の中で規定した過渡期Ⅱ世界プロ独下の過渡期とは質的に異つたものとして位置づけつつ、「ところが現代世界としての過渡期世界とは、プロレタリア独裁が世界プロ独としてではなく、一國プロ独とその複数体として(しかもそのスターリン主義的疎外体として)存在するところの、マルクスが当初予測しえなかつたところの過渡期である」(議案⑯)と規定するのである。「我々はこの現代過渡期世界Ⅱ資本主義社会とスターリン主義に疎外された過渡期社会Ⅰの總体的革命的解体・世界プロ独樹立をさしたたつての實踐的目標として確立する」(議案⑰)に明らかなく、彼らは、過渡期世界を資本主義の帝國主義段階から世界プロ独への過渡と規定するのである。

我々は、彼らのかかる過渡期世界論の個々の内容、即ち①三プロック、とりわけ「労働者國家」の性格規定、②現代世界の歴史的な位置の規定に對して直接的に「一対一的批判を加えるつもりはない。だが、これだけでは余りにも現象論的であり、歴史主義的であり、客観主義的でありすぎるのである。過渡期世界論は、過渡期世界の出現によって、即ち一九一七年のロシア革命の勝利と労働者國家の登場によってプロレタリアートは過渡期世界以前、いわゆる古典

と把握することができるし、△全人民の武装、武装ソヴィエト運動Ⅴとは権力闘争と把握できる。所で、大衆闘争の権力闘争への飛躍の爲には、それは自然成長的に可能なのではなく、まさに、党の戦略に導かれた質をもち、党形成Ⅱ階級形成を通して新たなヘゲモニーの實現を通してのみ可能である。我々はこの問題で、戦略的展望Ⅱ世界革命戦争、党形成Ⅱ階級形成Ⅱ党Ⅱソヴィエトの構造として代る△世界党Ⅱ革命戦線Ⅱの構造として提起し、これに媒介された安保決戦の、現局面の大衆闘争の階級決戦、権力闘争への飛躍の展望を提起したのである。所が、彼らの場合、かかる戦略的展望、党形成Ⅱ階級形成の新たな構造なるものに対して、全くの問題意識をもたないが故に、秋に對する組織戦術は、△革命党独自の△鉄の軍団Ⅴによる上からの実体的物理的指導Ⅴとして、全くの機能的主義と軍事Ⅴそれらも政治の最高形態として軍事ではなく、物理的軍事にⅤ力学主義への転落を示しているのである。だからこそ、△鉄の軍団Ⅴが如何なる党形成Ⅱ階級形成上の意義をもつのかを明らかにしえないが故に、△鉄の軍団Ⅴに参加し、これを担うことに同盟員が何らの関心も示さず、連日スカウトに走り回らなくてはならないのである。だからこそ我々は彼らに對して、戦略的展望、党形成Ⅱ階級形成を通してヘゲモニーの形成なき、大衆闘争から権力闘争へのラセン的貫徹ならぬ連続的・自然成長的發展という批判を行なわなくてはならないのである。

さて、同盟内閣は、秋の安保決戦に於て全面化する△転換点ⅤⅡ権力再編と権力闘争を實踐上の問題とすることを通過して、現代世界Ⅱ過渡期世界のプロレタリアの変革へ向けた全面論争・戦略・戦術・党形成Ⅱ階級形成をめぐる根底的な闘いへと發展した。何故なら、権力闘争Ⅱプロレタリア独裁の運動は、國家の廢絶(ブルジョア國家の打倒Ⅱ世界プロ独)と死滅(世界プロ独Ⅱ社会主義Ⅱ共產主義)をもって、世界革命の完遂をもつてのみ完結する運動だからであり、現実的な日本に於ける権力闘争も、機動隊との闘いⅡ自衛隊との闘いⅡ日米安保Ⅱ國際反革命同盟との闘いを發展し、かつ、このブルジョア國家と國際反革命同盟の對極に、必ずや、中・ソⅡ「労働者國家」とその軍隊の動きを必ずや結果するからである。

かかる観点に於て、四中委議案批判を、戦略、戦術論、および党形成Ⅱ階級形成論へと發展させなくてはならない。それは、具体的には、①過渡期世界論的な帝國主義段階と比した場合、如何なる階級の成熟を示したかを明らかにする方向で深化されなくてはならない。過渡期世界の変革主体たるプロレタリアートが、まさにその過渡期世界に於いて如何なる存在様式と自然発生性をもち、それ故、如何なる目的意識性を獲得することが出来るのかを明らかにしなくてはならない。何如なるか、かかる過渡期世界特有の自然発生性と目的意識性との結合を通して、過渡期世界のプロレタリアートは、過渡期世界とそこに於ける自己の存在様式そのものを世界プロ独Ⅱ世界社会主義Ⅱ世界共產主義Ⅱと変革し、いかなくなくてはならないからである。四中委議案は、過渡期世界に於ける存在様式Ⅱ自然発生性Ⅱ目的意識性を分析し、指定していないが故に、「先進國、後進國はもろろん「労働者國家」に於いても、その歴史的原動力は階級闘争であり階級闘争が世界共產主義實現にむけて三プロックを貫いているのである」(議案⑱)、「三プロックの革命的止揚解体Ⅱ世界階級闘争を追求する」(議案⑲)と語り、「世界革命戦争は共產主義Ⅱ社会主義への管制高地としての世界プロ独に向け、いわゆる三プロック階級闘争を結合し、革命の永続的完遂を推進する闘いであり、それ故、世界党が前提的に指定されねばならない」(議案⑳)、「そしてこの三プロック階級闘争の複合性を統合し、三プロック階級闘争を世界プロレタリア独裁Ⅱ世界社会主義Ⅱ世界共產主義に向けて、世界階級闘争としての相乘的単一的發展へと領導しぬく爲に、世界単一党建設を追求する」(議案㉑)として、世界革命戦争と世界党を指定しても、そこに一沫の空虚さを残すのである。この空虚さは何故するかといえば、世界革命戦争を担う主体ⅡヘゲモニーⅡ世界プロレタリアートの存在様式Ⅱ自然発生性と結合原理として設定しえないが故に、世界党がその物質的、組織的基礎を持ちえず、単なる論理性Ⅱ意識一般に還元され、世界党の指導が三プロック階級闘争の統合を組織するのではなく、三プロックのプロレタリアートへの世界プロ独Ⅱ世界社会主義Ⅱ世界共產主義の単なる宣伝とお説教に終つていからである。

帝國主義は、産業資本主義段階末期の過渡、資本Ⅱ恐慌の中から登場し、産業資本主義段階に特有な、自由で独立し流通過程を媒介としてのみ相互連関性を有していた個別資本に對して、独占Ⅱ金融資本Ⅱ金融寡頭制支配を通して、流通過程そのものを組織化し、物質的表を与えることを通じて、この個別資本を統合した。この帝國主義段階の登場によって、ブルジョア國家は、その共

同幻想性の基礎を単なる資本制分業関係一般という抽象性におくのではなく、個別資本—金融寡頭支配という物質化された実体性を獲得し、プロレタリアートの国家の下への統合を強化し、基礎として恐慌の矛盾を独占—国家を通して資本輸出として外化し、これらを基礎としてプロレタリアート—社会排外主義へと結集せしめたのである。だがこの個別資本の独占—金融寡頭支配—金融寡頭支配の統合の完成は、逆にプロレタリアートの個別資本の枠を越えた組織化の物質的・客観的根拠となり、かつ、過剰資本—恐慌という矛盾の独占—国家を媒介とした外化—資本輸出は、矛盾の外への蓄積（植民地領有—世界分割戦—帝国主義国家間戦争）を形成し、逆に、そのことを通じて独占—国家の物質的解体・社会排外主義の結果として、プロレタリアートによる帝国主義国家の打倒の条件を作り出した。レーニン主義、党形成—階級形成—「何をなすべきか」に於ける資本—労働の枠の外からの政治の持ち込みを通じたプロレタリアートの組織化、戦略、戦術—「帝国主義論」を通じた「帝国主義戦争を内乱」のテーゼは、かかる古典帝国主義段階下に於けるプロレタリアートの存在様式との関係に於いて、その意義を有するのである。

さて、かかるレーニン主義に導かれてプロレタリアートはロシアを突破口としてプロレタリア運動を現実化し、物質化されたものとして開始し、世界史は、帝国主義段階といえども、世界革命の前夜から世界革命の現実の過程—過渡期世界に突入した。ところで、我々がプロレタリア運動に言及する場合は、レーニンの「国家と革命」の次なる限界を指摘しない訳にはいかない。即ちここに於いて、レーニンは八国家の死滅—の問題を論じ、ブルジョア国家は死滅するのではなく、プロレタリア独裁によって暴力的に廃絶されるのであり、死滅すべき国家はこのプロレタリア独裁の国家であると主張した。そして、このプロレタリア独裁の死滅の過程を、社会革命の進展と階級の死滅としてプロレタリア過渡期—社会主義—共産主義として提出している。だがしかし、八国家の死滅—の条件にプロレタリアとだけ規定するのは不十分である。それは、社会革命—過渡期—社会主義—共産主義が世界的にしか実現不可能な以上、世界的な次元に於けるプロレタリア独裁の現実下に於けるプロレタリア独裁国家と規定しなければ不十分であり、誤りすら含むのである。かつ、プロレタリア独裁運動が、民族国家の最高に完成されたものとしてのブルジョア国家の廃絶を実現し、自己を国家の死滅

として貫徹する以上、このプロレタリア運動は、さしあたって民族的土台に於いて権力奪取—プロレタリアートの国家への組織化その運動を開始しようとし、それは決して民族的土台に於いては完結せず、唯一世界的次元に於いてのみ自己を完結する運動として、プロレタリアートを権力打倒—国家へ組織化するだけでなく、更にこれを前提として内部にかかる転倒を不断に含んだ運動として指定しなくてはならない。であるが故に、我々は厳密にはロシア革命の勝利と世界革命の敗北というふうにはなく、ロシア革命の敗北による世界革命の敗北というふうには言わなくてはならないのである。何如なら、ロシアプロレタリアートは、ソヴェエト運動—十月権力奪取を通して自己を国家へ組織しつつも、それ以降のロシアブルジョアジーの反革命と諸帝国主義国家の国際反革命との内戦の過程で、自己を国家として組織されたプロレタリアートから世界プロレタリアートへと、ソヴェエトから世界赤軍とこれを中核とする世界革命戦線へと飛躍させえなかったが故に、ロシア十月革命に呼応し、戦後危機を内乱へ転化しつつあった西欧、とりわけ独プロレタリアートとの結合を実現しえず、ロシア赤軍はワルシャワ進軍に於いて敗北し帝国主義国家群に包囲されたのだからである。ロシアプロレタリアートは八革命の輸出—に敗北したのでなく、自己を八国家として組織されたプロレタリアート—から八世界プロレタリアートへと転換しえなかったが故に八革命の輸出—に敗北したのである。さて、ここで八世界プロレタリアート—になるものが、党（当然にも世界党）としてしか組織化しえない根拠は、いまだ全世界的次元に於いて権力奪取と物質的生産手段の占有を、ソヴェエトの建設を実現していないからである。それは丁度、二重権力状況が政治的にしか出現しえず、ブルジョアジーはいまだ経済的—社会的支配権を有しており、かつソヴェエトに基づき権力奪取—プロレタリアートの国家への組織化と国家に於ける物質的生産手段の占有が一度実現されるか否や、その国のブルジョアジーは、反革命によるプロレタリア権力の解体を抜きにしては資本主義の復活と経済—社会的支配を復活しえないのと同様である。

だから、我々のいう世界革命戦争とは、党（世界党）—赤軍（世界赤軍）—世界革命戦線を、党によるプロレタリアートの二重性の矛盾（世界プロレタリ

アートとしての組織化と国民的支配階級としての自然発生性）を主体的担い、手として、全世界的次元に於けるプロレタリアートによる権力打倒と物質的生産手段の占有—世界革命の主体をめざさんとするものであり、四中委議案が世界革命戦争を通して三プロレタリア階級闘争の統合と世界プロレタリアの実現を主張し、世界党を主張しつつも、そこに一抹の空しさを感じさせざるをえないのは、まさに世界革命戦争を担う主体たることプロレタリアートの二重性の矛盾、とりわけ、世界赤軍—世界プロレタリア独裁以前に於ける世界プロレタリアートの運動—組織形態を指していないからである。

さて、かかるものとして世界革命戦争を把握した場合、我々は次の諸点に留意しなくてはならない。①それは、レーニン主義の戦略、戦術論、党形成階級形成論の修正と新たな戦略戦術論、党形成階級形成論の構築を要求すること。②①の事の為に、まさにその為に過渡期世界論を実践的に構築することの二点である。そして我々は四中委議案に対象化されている同盟内の傾向は、まさにこの①②を行っていないが故に、過渡期世界に於けるレーニン主義の教化を通してスターリン主義革命論への転落をなしているのである。

四中委議案は次の様に述べている。「わが同盟は次のテーゼを基本テーゼ、組織テーゼとして確立する。①世界—一國同時革命の下、先進国、後進国、「労働者国家」三プロレタリア階級闘争を世界プロレタリア独裁—世界共産主義の勝利—②世界—一國同時革命の下世界単—党建設—わが同盟は国際階級危機機論に基づき、現代過渡期世界の運動法則を規定するものとしての帝国主義の不均等発展をふまえて、帝国主義との対決を基軸に、基本テーゼを次の様に具体化する。③帝国主義の侵略、抑圧、反革命と対決し、国際反帝闘争と自国帝国主義打倒—世界革命戦争、世界プロレタリア独裁—④民族解放、プロレタリア独裁の武装闘争を強化し、国際反帝闘争を世界革命戦争、世界プロレタリア独裁—⑤スターリン主義官僚打倒、プロレタリア独裁復活をかしと、世界革命、世界プロレタリア独裁樹立の最新線—⑥（議案⑧）と。既に確認した如く、基本テーゼ—①②については、三プロレタリア階級闘争—八世界革命戦争を通して「世界プロレタリア独裁—と組織テーゼ—①②については世界単—党—世界赤軍—建設へとしてほしいものである。

だが問題はそれ以下の部分である。即ち基本テーゼ—①②を三プロレタリア、先進

国—帝国主義階級闘争、後進国階級闘争、「労働者国家」階級闘争へと具体化、適用しつつ、③④⑤⑥を設けているが、そこに於いてかかる三プロレタリア階級闘争の統合—世界革命戦争の主体—ヘゲモニーを結局の所、帝国主義国プロレタリアートに担わせんとしている点である。この点こそ、前記の及び②の問題、即ち、①レーニン主義の戦略、戦術論、党形成—階級形成論の歴史的限界を止揚して新たなそれを打ちたてるべきこと。②まさに①の客観的、物質的基礎を明確にする方向—過渡期世界論、過渡期世界に於けるプロレタリアートの存在様式の解明を発展、深化さすべきことの二点に対して無理であるが故に、過渡期世界に於けるレーニン主義の教化を通してスターリン主義の転落の一つの集約点をなしている。

世界革命戦争—三プロレタリア階級闘争の世界プロレタリア独裁—向けての統合のヘゲモニーを帝国主義国プロレタリアートの闘いに設定せんとする四中委議案の傾向は次の通りである。前掲引用文中に於いては、「帝国主義との対決を基軸に、基本テーゼを次の様に具体化する」とわざわざ、特別に断りながら、基本テーゼ—①②の具体化、適用を、以下③—「帝国主義階級闘争—④—後進国階級闘争—⑤—「労働者国家」階級闘争の順番で並べた点に、あるいは又、「三プロレタリアの結合環は……自国帝国主義打倒—安楽、NATO粉砕、ベトナム革命勝利」の「前段階決戦」である（議案⑧）とした点にもあらわれている。即ち、三プロレタリア階級闘争の結合環を八自国帝国主義打倒—前段階決戦—に、帝国主義国プロレタリアートの権力闘争にむかんとしているのである。

世界革命戦争—三プロレタリア階級闘争の世界プロレタリア独裁—向けての統合の主力が帝国主義国プロレタリアートであること、世界革命戦争の突破口が、帝国主義国プロレタリアートの八自国帝国主義打倒—前段階決戦—に権力闘争の開始によって切り開かれることは、まさに、決定的に主張されなくてはならない。我々は、まさに、日本プロレタリアートは秋の安楽決戦をもって権力闘争を開始すべきことを主張しつつきてきたのである。だがこのことは、帝国主義国プロレタリアートの権力闘争が、あるは一国に於けるプロレタリアートの国家への組織化が世界革命戦争のヘゲモニーであることを意味しないし、その様な把握は誤りである。世界革命戦争は、プロレタリアートの二重性（一方で国家へ、他方でそれを越えて世界プロレタリアートへ）によって、党（世界党）—赤軍

(世界赤軍)―世界革命戦線の構造によってのみ担われらるのである。だから、帝国主義国プロレタリアートが八自国帝国主義打倒―前段階決戦―権力闘争を日程にのぼせつあるが故に、党―軍―革命戦線へ向けた、二重性を止揚する組織路線の確立の我々にとって緊急の課題となっているのである。帝国主義国プロレタリアートはこの自己の二重性の止揚を抜きにしては権力闘争―世界革命戦線の主体たりえないし、逆に又後進国、「労働者国家」プロレタリアートも同様である。

かかる問題は、①「なにをなすべきか」に於ける党形成―階級形成論、②「二つの戦術」、「帝国主義論」に於ける戦略―戦術論、総じてレーニン主義の再検討を我々に迫るものである。即ち、①に於いてレーニンが実践的に追求せんとしたのは、プロレタリアートを、資本―賃労働の枠内、現実的には個別資本とその下での経済闘争の枠内から解放し、国家とそれをめぐる諸階級、諸階層の政治闘争の中に登場させ、そのことを通じて、プロレタリアートを國家へ、権力打倒―蜂起へ組織化せんとするのである。従って、プロレタリアートは二重の組織化、とりわけ世界プロレタリアートとしての組織化という点に於いては決定的な欠陥を有しているのである。②に於いてレーニンが実践的に追求した問題は、ロシアプロレタリアートの権力への、國家への組織化の道とそれが世界ととりわけ西欧―独に与える影響の問題であり(二つの戦術)かつこのことが資本主義―帝国主義の如何なる危機を条件として可能であるかである。(帝國主義論―帝國主義戦争を内乱)。だから、この戦略―戦術論は「何をなすべきか」を基礎とした党形成―階級形成論との連関に於いて、一國の、とくにロシアプロレタリアートが権力へ、自己の國家としての組織化へ向るの客観的条件―主体的条件及びこの結合を通じた客観的過程と筋道を明らかにしたという意義をもつのであるから、逆に、一國のロシアのプロレタリアートが現実的なゴールとして設定された権力、國家へ到達し、そのことを基礎として、ロシアのみならず全世界プロレタリアートの現実的ゴールが、単に一國に於ける権力、國家ではなく、世界プロレテとして設定されてくる段階で、ロシア十月革命の勝利―労働者國家の出現―過渡期世界への突入の段階で、その限界を露呈した。ロシア革命―権力奪取が独に飛火し(二つの戦術)、帝國主義戦争の危機を各國でプロレタリアートが内乱へ転化し(帝國主義論)ている中で、

プロレタリアートは単なる一國での権力打倒を越えて、世界プロテ独へ向けて何をなすべきかを明らかにしていけないのである。

かかるレーニン主義の戦略―戦術論、階級形成論の限界は次の二つの歴史的規定性を有している。①それがロシア革命―権力奪取の勝利―労働者國家の出現―過渡期世界突入の以前のものであること。②産業資本主義段階末期に於ける資本主義の矛盾―過剰資本の発現―恐慌を革命に転化することにプロレタリアートが敗北し(焦点はバロッキョンの敗北)、逆にこの矛盾―過剰資本が資本によって、帝國主義の登場として、個別資本の独占―金融資本―金融寡頭制支配を通して資本輸出として外化され、かつ、個別資本―独占―金融資本―金融寡頭制支配を通して帝國主義國家はブルジョア國家一般の幻想共同性を実体的、物質的、構造的にうち固めてプロレタリアートの統合を強化し、さらに、過剰資本―矛盾の外化としての資本輸出と帝國主義國家の下へのプロレタリアートの統合とを基礎として、社会排外主義は形成された。従って、その戦略―戦術論、党形成―階級形成論の中心は、資本主義の矛盾―過剰資本の外化―資本輸出の諸系列、即ち、個別資本―独占―金融資本―金融寡頭制支配の系列の形成がブルジョア國家の強化―帝國主義國家の登場を一方で促進しつつ、同時に他方で、この過剰資本の資本輸出そのものが、植民地領有―世界分割―帝國主義國家間戦争を通して帝國主義國家の解体を結果することの解明に、更に、個別資本―独占―金融寡頭制支配―帝國主義國家の諸系列を通して過剰資本の外化―植民地領有―世界分割―帝國主義國家間戦争の進展の中で、資本―賃労働の枠内、個別資本に対する経済闘争という枠内でのプロレタリアートの運動―経済主義が、植民地領有―過剰利潤を基礎に日和見主義へ、帝國主義國家間、戦争を媒介に社会排外主義へと結果し、反動化するのに対し、國家と諸階級、諸階層の連関の場合へ、帝國主義國家と植民地人民の対抗関係の場合へのプロレタリアートの登場と組織化、政治闘争、反動闘争の組織化に、そして、かかる客観的条件と主体的条件を結合したプロレタリアートの権力奪取、國家への組織化に、その戦略―戦術論、党形成―階級形成論の中心はおかれざるを得なかったこと、この二点である。

一國に於けるプロレタリアートの権力奪取―國家への組織化に戦略、戦術の中心を、党―ソヴェト(國家として組織されたプロレタリアート)に党形成ターリン主義は、まさにロシア労働者國家の利害のもとに一切の國際階級闘争を従属せしめて、世界革命の敗北を二層拡大固定化してきたのである。四中委議案に対象化される同盟内の傾向―ヘゲモニーが、世界革命戦争を帝國主義国プロレタリアートの権力、國家への組織化の固定化であり、その下への國際階級闘争の結合であり、ロシア労働者國家に國際闘争を従属させたスターリン主義と同質であり、かつそこから展望される世界的プロテ独なるものは、そこに八世界プロレタリアート√が存在しないが故に、単なる世界各國に於ける労働者國家の連合体となり、論理的には、一國プロテ独―一國社会主義―一國共產主義としてスターリン主義そのものに転化するのである。

さて、我々は、レーニン主義の戦略―戦術、党形成―階級形成の限界を越えて、あなたにそれを、世界プロテ独―世界革命戦争、党(世界党)―世界赤軍(世界プロレタリアート)―世界革命戦線として確立せしめている。この我々の道の客観的、物質的、科学的根拠は、現代世界、過渡期世界、とりわけここに於けるプロレタリアートの存在様式そのものである。世界革命戦争、世界プロテ独へ向けてプロレタリアートを世界赤軍―世界プロレタリアートとして組織化しうるこの客観的根拠は次の諸点である。①は言うまでもなく、過渡期世界への突入の歴史的メルクマールたるロシア十月革命―権力打倒の勝利と労働者國家の出現である。プロレタリアートは資本主義の形成以降一貫してブルジョア國家―民族國家の完成の下に統合されつづけてきたが、帝國主義の登場、個別資本の独占―金融資本―金融寡頭制支配の下への統合を通じた過剰資本―矛盾の外化―資本の輸出の出現以来、帝國主義國家の下へのプロレタリアートの統合は、実体的、物質的、構造的に強化された。だが、ロシア十月革命と労働者國家の登場によってプロレタリアートの存在そのものが、ブルジョア國家―帝國主義國家を越えたものとして第一に確認しなくてはならない。だがこのことから、直接的に、世界革命戦争―世界プロレタリアートの客観的根拠を語るだけでは不十分である(そののみは根拠地國家論―左翼スターリン主義的である)。②何故なら、労働者國家プロレタリアートは、スターリン主義によって、その國家としての組織化、民族的表现に固定化させられているのである。③④のことを世界革命の敗北を手段としながら、帝國主義は、個別資本の独占―金融資本―金融寡頭制支配への統合による過剰資本―資本輸出を

―階級形成の中心をレーニン主義がおいたのに対し、我々は、ロシア革命―権力奪取の勝利―労働者國家の出現―過渡期世界への突入の現実をふまえ、戦略―戦術の中心を世界プロテ独の樹立―世界革命戦争へ、党形成―階級形成の中心を党(世界赤軍)―世界赤軍(世界プロレタリアート)―世界革命戦線に設定しなくてはならない。かかる観点からする場合、四中委議案に対象化されている同盟内の傾向―ヘゲモニーは、過渡期世界に於けるレーニン主義の教条化を通じたスターリン主義への転落として、次の二点で規定させざるを得ないのである。①過渡期世界を資本主義の帝國主義段階から世界プロテ独への過渡とし、戦略―戦術は一國に於けるプロレタリアートの権力打倒―國家への組織化を越えて世界プロテ独へ向けた世界革命戦争として設定しつつも、世界革命戦争を担う主体―ヘゲモニーを帝國主義国プロレタリアートの八自国帝國主義打倒―前段階決戦―権力闘争においてある点である。それは、戦略―戦術の主体的把握を返し、党形成―階級形成に於いては、プロレタリアートの二重の組織化、特に、世界プロレタリアートとしての組織化は格差され、依然としてプロレタリアートの國家への組織化―党―ソヴェトの次元にとどまり、レーニン主義と同次元である。それ故、彼らはまさに過渡期世界に於けるレーニン主義の教条化なのであり、ここから再度、戦略―戦術を位置づけるならば、それは結局のところ、帝國主義國に於ける八自國帝國主義打倒―前段階決戦―権力闘争から世界プロテ独―世界革命戦争を切り開くという(それ自身正しく)突破口論、飛火論にすぎないのである。②では、何故、かかる過渡期世界に於けるレーニン主義の教条化がスターリン主義への転落を結果するかという点に、次のことによる。我々は、ロシア十月革命―権力打倒以降、内戦と革命の輸出(ポーランド進軍)過程に於いて、ロシア、否全世界のプロレタリアートが、自己の二重の組織化を実現しえなかつた結果として、ロシア革命の敗北と世界革命の敗北があり、これをスターリン主義の歴史的根拠とせざるを得ない。ロシアプロレタリアートが自己の國家への組織化を固定化せざるを得なかつた歴史的根拠と、レーニン「國家と革命」に於ける、あたかも、一國に於けるプロレタリア―独裁國家の登場が世界プロテ独を前提としたので死滅(過渡期)社会主義―共產主義)を開始するかの如き傾向という論理的、主体的根拠が結合する時、そこには当然にも、スターリン主義―一國社会主義可能論が登場する。そしてス

一層させ、プロレタリアートの帝国主義国家統合を維持しつづけてきたからである。だがしかし、④帝国主義の新たな発展とプロレタリアートのブルジョア国家への統合の維持は現代帝国主義国家の運動と言えども労働者国家の解体とそこに於ける資本主義の復活を実現しない限り、総ての全世界プロレタリアートを完全にブルジョア国家—帝国主義国家の下へ統合し抜くことに不可能であり、まさに、それ故、現代帝国主義、現代帝国主義国家の運動は、不断に、過渡期世界に規定されたプロレタリアートの世界性の発現を、その内外に形成せざるをえないのである。以上のこと、とりわけ④こそ、プロレタリアートの二重性を止揚する主体的条件と結合されることによって、帝国主義国プロレタリアートの八国帝国主義打倒—前段階決戦—権力闘争を突破口として世界革命戦争が開始される客観的条件である。

### ■ 攻撃型革命論か、受動型革命論か

ロシア10月革命—権力奪取の勝利—労働者国家の出現—過渡期世界への突入を客観的、物質的、歴史的基礎としてプロレタリア革命の戦略—戦術論、党形成—階級形成論の核心点は、権力奪取—プロレタリアートの国家への組織化—レーニン主義から飛躍して、世界プロ独の實現—世界プロレタリアートの組織化におかれなくてはならない。これこそ我々が獲得すべき基準である。戦略—戦術、党形成—階級形成に於けるレーニン主義と我々のかかる基準—主体性の質的相違こそ、レーニン主義の受動型革命論と我々の革命論を分ける分岐点である。ところが、四中委議案は、⑤過渡期世界に於ける国際的階級危機と世界革命への戦略の展望、及び⑥国際階級危機の形成と安堵決戦に於いて、戦略—戦術論を⑦同盟の飛躍的強化を—軍と党に於いて党形成—階級形成論を展開している訳であるが、①世界プロ独—世界革命戦争、あるいは世界党—世界プロレタリアートなる基準—過渡期世界に於ける主体性が確立していないが故に、戦略—戦術論は、危機論—危機対応策論という客観主義に、党形成—階級

形成論は単なる機能主義に転落しているのである。さて、以上の確認の上に、我々は、戦略—戦術論を、①過渡期世界論—現代帝国主義論—国際階級危機論—②現代帝国主義国家—なし崩し—ファシズム論—③帝国主義国に於ける自国帝国主義打倒—前段階決戦を通した権力闘争を突破口とする世界革命戦争—世界プロ独の實現として展開しなくてはならない。①の問題、即ち、現代世界の把握を、一方に於いて、主体の側—プロレタリアートの階級形成の歴史的到達点として、資本主義の帝国主義段階から世界プロ独への過渡—過渡期世界論として構成しつづ、他方に於いて、現代帝国主義論及び、それを基礎とする国際階級危機論として、10月革命—権力奪取の勝利—労働者国家の出現—過渡期世界への突入によって、プロレタリアートの存在は、帝国主義段階の古典的展開期（一九一七年—ロシア革命以前）の如き存在、ブルジョア国家—帝国主義国家の下に全世界に於いて、具体的、物質的、構造的に統合され、分断されていた存在から、労働者国家を物質的基礎として、ブルジョア国家—帝国主義国家を越えた存在、不断にその世界性を発現する存在へと飛躍した。しかしながら、既に確認した様に、レーニン主義の歴史的境界とスターリン主義によって労働者国家プロレタリアートはその組織化—団結形態を—国家としての組織化—に固定され、帝国主義国—資本主義国プロレタリアートは、その団結形態—組織化—を—権力奪取—国家—組織化—に限定されることを通じて、ロシア革命と世界革命との敗北が結果したのである。これによって延命した帝国主義—現代帝国主義—その運動を開始するからである。その場合、現代帝国主義の運動は次の二重の規定を有する。即ち、①段階論的に規定された帝国主義本来の性格、②労働者国家の出現を基礎とするプロレタリアートの帝国主義国家を越えた存在の解明の二点である。

①については、資本主義本来の矛盾—過剰資本の発現が、産業資本主義段階に於いては、恐慌—世界恐慌を通した過剰資本の暴力的破壊を結果したので、対し、帝国主義段階に於いては、この過剰資本の暴力的破壊が国家政策を媒介に戦争に於いて完結するものとして把握されなくてはならない。即ち、個別資本の独占—金融資本—金融寡頭支配—帝国主義国家への統合を通して、過剰資本の矛盾は資本輸出として外化され、かかる帝国主義国家の外部への矛盾の再構成されなくてはならないのである。

②の二重の規定性を有する現代帝国主義の運動（帝国主義の侵略、抑圧、反革命）が、全世界的な過剰資本の暴力的破壊—世界分割の戦争—反革命戦争として完結せんとするまさにその対極に、世界プロ独—世界革命戦争—世界プロレタリアートへ向けたプロレタリアートの世界性の発現を結果するものとして把握されなくてはならない。この現代帝国主義の侵略、反革命戦争は、質に於いては、帝国主義国家戦争—植民地侵略戦争—労働者国家戦争を内包し、現実形態に於いては、諸々の形態をとるのである。

以上の如く、我々は、世界プロ独—世界革命戦争を世界プロレタリアートを主体とした戦略—戦術の第一の内容を、過渡期世界—現代帝国主義論—国際階級危機論として提出する。所が、四中委議案に對象化されている同盟内の傾向—ヘゲモニーの諸君にあつては、戦略、戦術の基準—主体性が、いまいであり、中途半端であり、未確定であるが故に、現代帝国主義論—国際階級危機論に於いて、次なる不充足性、誤謬を結果するのである。①帝国主義論の段階的確立の不充足性、即ち、過剰資本の暴力的破壊が、産業資本主義段階に於いては、恐慌—世界恐慌として完結したのに対し、帝国主義段階に於いては、むしろ恐慌を発現させつづ、個別資本の独占—金融資本—金融寡頭支配への統合を通して、帝国主義国家の外部に過剰資本を資本輸出し、この矛盾の蓄積は、帝国主義国家による世界分割—世界戦争を結果し、このことよってのみ過剰資本の暴力的破壊が完結することへの無理である。このことは、一方に於いて恐慌革命論—危機待望論を結果し、他方に於いて危機把握の「一國性」へと結果する。②帝国主義把握の「一國性」は、過渡期世界論—現代帝国主義論なる視点の確立を不可能とし、現代帝国主義論を国家独占資本主義政策論へと陥没させ、そのことを通じて、国際階級危機論は、国際性を喪失し、各国階級危機論に転落





って来たが故に、まさに『反革命同盟粉砕』の高度な政治闘争と『反帝国主義再編』が媒介に推進されてきたのである。として、日帝の侵略、反革命世界戦争一なし崩し崩壊フアンズムに指導する世界革命戦争一権力闘争への指導が恐ろしく逃げ出しつ、ついで「貫しつ」で指導を受け持つ「たつよき、平和な過去をなつかしからん」次は「しかし、反革命同盟は、まさに再編されんとしつて……だから反革命同盟粉砕は、革命同盟再編として……全世界プロ独樹立の国際主義的闘いとして、闘いぬかれねばならないのである」となっている。だが、反革命同盟再編とは帝国主義の侵略反革命戦争であり、反革命同盟粉砕では手には棍棒だけであったが、反革命同盟再編粉砕のときには、鉄砲が必要であり、国際主義的闘いとは世界革命戦争であるとも、考えてみただけでも恐ろしくつて言えないのである。さらに膨張帝国主義たる西独の階級階級を分析し、「ヨーロッパ情勢の鍵はドイツの動向、とりわけ九月総選挙の過程と結果である。NATO再編は、これによって具体化が推展するであろう。いうまでもなく、我々の今秋の準備から見れば、西独階級闘争は決定的に立ち遅れている」と言っていて、ドイツ人は侵略、反革命世界戦争に清き一票で立ち向かうのであるから、考えてみれば、鉄砲を捨てて棍棒にちかえた自分も、世界の中では相当革命的な方だと安心しているのである。さらに、次は一転して、没落帝国主義に眼を向け、「むしろ、政治的性格は、今秋に向けて階級闘争がより高揚するであろうは、イタリアとフランスである。……昨年のフランスの役割は、今秋にかけてイタリアが果たすであろう。……恒常的な経済危機と経済ストライキの勃発、これがフランス階級闘争の基調である」として、やっぱり、経済危機の恐怖がきてから革命をやらう、フランス人やイタリア人は、こわいだろうけど、それはお前の国の資本家が弱いからと諦めて、鉄砲をもってくれと言っているのである。

「後進国に於いては、ベトナム人民を最先頭とした民族解放、プロ独樹立、世界革命戦争への萌芽的闘いが増々拡大するであろう。我々の今秋闘争は増々これらの闘いに鼓舞されるものである。とりわけアジアにおいては韓国情勢が今秋の基調となる」として、悪夢の如き、国際階級危機論ならぬ、各国危機寄せ集め論としての帝国主義国プロ独危機論をようやう脱して次の寄せ集め論の為に後進国プロ独に入っていく。後進国人民武装解放闘争がまさに帝国主義

的欺瞞性の表現だということをお告ししておく。  
さて、我々は、現代帝国主義論—国際階級危機論に於ける彼らの誤謬、①帝国主義の一国の把握、②帝国主義の一国の把握—国際階級危機論の国際性の喪失と各国、各プロ独危機寄せ集め論への転落を確立した。そして、いよいよ、③国際階級危機論に於ける国際性喪失と各プロ独危機寄せ集め論—受動型革命、前段階決戦の否定、一國革命主義—スターリン主義の論証へと突き進まなくてはならない。

まずこの論証に直接に入るのはなく、過渡期世界—現代帝国主義論—国際階級危機論を第一にふまえた上での、我々の戦略—戦術の第二の内容たる現代帝国主義国家—なし崩し崩壊フアンズム—前段階決戦—前段階蜂起を確立しておく。

我々は現代帝国主義論—国際階級危機論を次の如く確定した。まず現代帝国主義論に於いては、個別資本が独占—金融資本—金融寡頭制支配—帝国主義国家の下へ統合され、これを媒介として、産業資本主義段階に於いては恐慌—世界恐慌として暴力的破壊を実現されていた過剰資本が資本輸出として帝国主義国家の外部に蓄積され、世界分割として帝国主義国家の世界戦争に於いて暴力的に破壊される帝国主義の段階的特質を確認すること。更に、かかる段階の本質の現実的発現形態、とりわけ、第二次大戦後のそれを規定する次の二要因を確認しなくてはならない。①産業構造の変化（重工業—重化学工業）を基礎とする独占—金融資本—金融寡頭制支配—帝国主義国家—系列の発展（国家独占資本主義政策）、資本輸出機械の発展（金本位制—再建金本位制—IMF）、資本輸出の形態変化（商品輸出拡大—利子生み—利潤生み資本輸出）、世界分割の形態変化（先進国市場の比重増大、古典的植民地主義—新植民地主義）等が第一である。②「労働者国家」群の登場、拡大とそれに規定されたプロレタリアートの存在様式の変化による帝国主義世界戦争の発現形態の変化と多様化、即ち、植民地侵略戦争、帝国主義国家戦争のみならず、対労働者国家戦争が、論理的に指定され、植民地侵略戦争—帝国主義国家間戦争よりも植民地侵略戦争—「労働者国家」戦争の現実的可能性の決定的増大が第一である。そして我々は、かかる現代帝国主義の第二次大戦後の決定的運動が、米帝国主義の先行と西欧、日本帝国主義の後発という不均等発展と平準化として実現されたこ

義の侵略・反革命戦争として展開、拡大され、「世界革命戦争への萌芽」を實現しつづつあることは完全に黙殺されている。その上、あつかましくも、鉄砲を投げ出した自分達を助けた鉄砲をもった後進国人民が来てくれないかと心秘かに願っていたのである。次なる寄せ集めの相手は「労働者国家」階級闘争である。「帝国主義の侵略・反革命戦争に從つて、増々動揺と混乱を深めているのは、「労働者国家群」であり、その階級闘争である。」という。帝国主義の侵略・抑圧・反革命が「労働者国家群」を動揺と混乱に陥しつづつていくことは、とりまなおよす八国家として組織され、それをスターリン主義によって固定化されたプロレタリアートの再編が連続していることであり、帝国主義と対決せんとするその自然発生性はとりまなおよす八世界革命戦争—世界革命戦争—世界プロレタリアートへの自然発生性であることを完全に見落しているのである。

以上が恐慌危機論、帝国主義把握の一国性を原因とする、相互連関性を完全に欠落させた各国危機寄せ集め—各国プロ独危機—三プロ独危機寄せ集め—国際階級危機論の典型である。そこには、安保・NATO—国際反革命同盟再編—侵略・反革命世界戦争へ至る現代帝国主義の動向も、かつこの対極にこの動向が形成する安保・NATO—国際反革命同盟再編—世界革命戦争へ至るプロレタリアートの自然発生性の増大も完全に捨棄されているのである。断わっておくが我々は各国、各プロ独階級危機論の分析をする必要がないと主張するのではなく、それをまさにかかる国際階級危機の成熟の各国、各プロ独の表現としておこなわれなくてはならないと主張し、その為には、過渡期世界—現代帝国主義論の確立、段階論現実形態論を通した現代帝国主義の世界的把握が必要だと主張しているのである。四中全会案は、かかる視点をそもそももっていないが故に、先述の如き誤謬に到達するのである。批判が必要分析的となつたが、四中全会案に於ける現代帝国主義論—国際階級危機論（議案）及び①の前半）はかかる誤謬を含むのみならず内容的にも全くおそまつ振るまわものであり、まさに心理分析の対象でしなからず内容的にも全くおそまつ振るまわしてさえないやうであるが、その原因は八秋と鉄砲にだけなく、最近発生した、我々の関与しない八同盟内況が生み出しつづつある「ハブニング」にもあるらしい。だがこの「ハブニング」は、単なる「ハブニング」ではなく、実は彼の政治

と、そして、IMF—国際通貨体制、NATO、安保—国際反革命同盟形成は、不均等発展の過程的表現であり、その再編とは平準化の表現であることを確認しうる。それ故に、IMF体制の再編—なし崩し崩壊フアンズム—統制経済化、西独・日本帝国主義が、戦後米帝の地点、それから一貫して推進した後進国侵略、反革命戦争—対「労働者国家」戦争への志向の地点にまで到達しつづつある表現である。そして米帝のみならず日帝・西独帝をも含んだ侵略、反革命戦争は、不可避に、仏・英・伊も巻き込む可能性が強いのである。安保・NATO—国際反革命同盟の再編、強化を通した帝国主義の後進国人民武装解放闘争、「労働者国家」に対する侵略、反革命戦争の危機こそ国際階級危機の第一のメルクマールである。

安保・NATO—国際反革命同盟再編—強化—帝国主義侵略、反革命世界戦争の危機は、その対極に、三プロ独階級闘争の世界革命戦争—世界プロ独に向けた自然発生性を巨大に形成する。拡大する後進国人民武装解放闘争がその第一である。「労働者国家—プロレタリアートのそれは、極めて屈折した表現をとっている。それは一方ではスターリン主義による帝国主義国際反革命同盟に対する軍事的対抗の強化を形成し、他方でまさにこの帝国主義—国際反革命同盟との対抗が「労働者国家—プロレタリアートの中に世界性を自然発生的に形成し、かつかかる自然発生性は直接的に自己の存在様式として組織されたプロレタリアートと衝突するが故に、そこで形成される巨大なエネルギーを帝国主義打倒—世界革命戦争—世界プロレタリアート—と組織する「ヘゲモニー」が不在するが故に、「労働者国家」間の武力衝突—とその矛盾は外化されつづつある。そしてIMF体制再編—なし崩し崩壊フアンズム—なし崩し統制経済化と安保・NATO—国際反革命同盟再編、強化を通して形成されつづつある帝国主義の侵略、反革命戦争の危機は、まさに、過剰資本の世界市場に於ける暴力的破壊を帝国主義国家外部への資本輸出—世界分割型戦争に於いて表する帝国主義の段階的特質の現代帝国主義に於ける現実的形態である。まさに、であるが故にそれは過渡期世界—現代帝国主義に於ける階級闘争の質—到達点、即ち、権力奪取—労働者国家の出現を主体的根拠としてプロレタリアートが世界革命戦争—世界プロ独への現実的運動を展開するの、ある



むしろ、ここで問題なのは、我々の闘いが、最低限佐藤政府では「やって、いけなくなる」ような階級防衛関係が作り出さるか否かこそ主体的に問われているものとして、『佐藤なし崩しファシズム政府』を特徴付けなければならない。『前段階決戦』の時代に入れるか否かが、我々の主体的力量によって決せられるものとして、今この位置付けねばならないのである。……我々の前進によって、佐藤政府を打倒してブリュニングや、ソヴォフ・ケレンスキー政府にアナロジされる政府を引き出しうるか否か『決戦』を要求される『前段階』に入るか否かこそ問われているのであつて」と。

彼らは、現代帝国主義——国際階級危機論においても、段階論と現実形態論をこたませにして、二〇年代相対的安定期——一九九〇年世界恐慌——三〇年代国際階級危機（前段階決戦の敗北）——帝国主義世界戦争（第二次大戦）を直接現在に於ては、IMF体制——世界市場崩壊——世界恐慌——国際階級危機（侵略反革命戦争か、世界革命戦争か）——前段階決戦なるシエーマを作つてくれた。ここでも同様のあてはめもやつてゐる。即ち、ワイマール体制下の政府——現佐藤政府——一九九〇年恐慌——ナチス勝利までの大統領政府——佐藤訪米——七〇年安保確定後の政府（これがなし崩しファシズム）——ファシズム前段階政府）——この段階がファシズムが権力奪取——プロ独かが問われる前段階決戦期——プロ独——権力奪取が敗北すればファシズムと侵略反革命世界戦争である。

かかる、アナロジとあてはめ、実は段階論と現実形態論のこたませに起因する。即ち、第一次世界大戦後、二〇—三〇年代に於ける現代帝国主義の運動が、帝国主義の段階の本質過剰資本の資本輸出——世界分割——世界戦争を通して暴力の破壊を、一九九〇年恐慌——プロック化、統制経済、国独資政策の発展（ニューデール経済、ナチス経済）——独伊ファシズム帝国主義国家と米英仏帝國主義国家との世界戦争として現実化させた根拠は次のものである。まず第一に、プロック化、統制経済化、国独資政策の発展が、一九九〇年世界恐慌を媒介として、一挙的に実現せざるをえなかつた最大の理由は、米帝國主義と西欧、日帝の間の極端な不均衡である。

即ち、産業構造の重化学工業化、国独資政策の発展は、二〇—三〇年代を通して、米帝國主義の先行として開始され西欧、日帝に於ては（独帝國主義が議會制民主主義体制からファシズムへの連続的進展過程なのであり、現佐藤政府はまさにこれなのである。

であるが故に、我々は、すでに前段階決戦を開始すべき地点に到達しているものであり、安保決戦はそれ故、階級決戦権力斗争の展望のもとに闘いぬかれなくてはならないのである。以上のことから、我々は、四中委議案に対象化されている同盟内の傾向が、一方では、過渡期世界論——現代帝国主義論——国際階級危機論の把握の誤りを通して、スターリン主義革命論に転落していると同時に、他方では、なし崩しプロック化——なし崩し統制経済化と国際反革命同盟再編強化と権力再編——なし崩しファシズム前期なる規定を通して、前段階決戦を否定し、帝国主義国階級斗争から世界革命の実現を否定していると言わなくてはならない。

三〇年代ナチス経済に於て部分的に実現したといへ、それは、第二次大戦以降の不均等発展を通して、実現され、現在、世界的平準化に到達しつつあるのである。かつ、一九九〇年恐慌と二〇年代前半の世界的不況に於ても過剰資本は暴力的に破壊されず、それは第二次世界大戦に於てのみ実現されたことを確認しなくてはなるまい。

第二に、諸帝國主義が第二次大戦に於ける前段階で形成した二〇年代国際階級危機に於て、日、伊帝國主義がファシズム権力を形成せざるをえなかつたのは、まさに、その国に於て、過渡期世界特有の階級闘争が展開されたからである。具体的には、伊に於ては、第一次大戦後の革命情勢として、日本に於ては日帝が中国侵略の中で、中国革命と対決を要求されたことに、独に於ては、ロシア革命の影響を極めて大きく受けた階級斗争の高揚がそれである。総じて、三〇年代に於ては、米帝を除いて、西欧、日帝國主義の全てがかかる現実面に直面していることも確認しなくてはならない。第三に、独に於ける危機とファシズムの登場が、ワイマール体制——一九九〇年世界恐慌以降の中間政府——ファシズムの登場と勝利として展開された根拠は、まさに第一のことに規定されていることを確認しなくてはならない。かかる、第一、第二、第三の問題は、現実形態論として把握されるべきものであり、これを直接的に現在に於てはめることにはできない。現在に於ては、現帝國主義の不均等発展と世界的平準化によって、プロック化——統制経済化がIMF体制の崩壊世界恐慌を媒介としないで、むしろIMFの再編を通してなし崩しのに実現されつつあることを確認しなくてはならない。そして、帝國主義世界戦争も、侵略反革命世界戦争へ向け、安保、NATO——国際反革命同盟再編——強化を通して、なし崩しのに、局地戦を媒介しつつ形成されんとしていることを確認しなくてはならない。それゆゑ、ファシズムの形成も、議會制民主主義体制——中間政府——ファシズムの登場として、明確に区分と転換点をもつたものとしてではなく、議會制民主主義体制から、ファシズムへの極めてなし崩しのな進展が展開されるものとして、把握しなくてはならない。であるが故に、現佐藤政府——議會制民主主義政府——訪米——七〇年安保確定後の政府——中間政府——ファシズムの登場と、これとの決戦なる把握、四中委議案の底流は、決定的に誤つてゐる。なし崩しファシズムは、議會制民主主義体制の崩壊とファシズム登場前段階なのでなく、

共產主義者同盟赤軍派  
政治理論機関誌

赤軍 No.8

発行 1970年2月15日

価格 300円

連絡先 TEL (03) 369-2380